

標註枕草紙讀本

五

特別

イ 4

3163

214(5)



頁
14
3163
24(5)

標注枕草紙讀本目次

卷五

さこがしき物	一丁	ふいがしろなる物	一丁	詞なめげなる物	一丁	
さかしきもの	一丁	上達部ハ	二	公達ハ	二	
法師ハ	二	女ハ	二	宮仕へ所ハ	二	
天人ハ	やと見ゆる物	三	雪ふる日	三	殿上人	四
たまきふ過る物	四	殊ふ人よちられぬ物	四	赤衣着たる児	四	
ほしきまをれ歌	四	うぐひもと郭公	五	稻刈るさま	五	
いみじきたふき物	六	せめて恐しき物	六	頼もしき物	六	
人の心もちひ	六	うきしきもの	十	積善寺の供養	十四	
たふしき物	卅一	歌ハ	卅一	さしぬきハ	卅一	

枕草紙 卷五目次

かりぎぬハ	三二	ひとへハ	三二	しろき物ハ	三二
下がさねハ	三二	扇の骨ハ	三三	檜あふぎハ	三三
神ハ	三三	崎ハ	三三	屋ハ	三三
時奏まゐる	三三	成信中將	三四	兵部	三四
玉づさ	三八	きらくしき物	四一	火桶の火	四十
香爐峰の雪	四一	陰陽師の許ある童	四一	柳のまゝ	四一
暮しかねける	四二	こよたれ長居	四三	凜々として氷鋪り	四三
とやづかへ人	四四	見習ひする物	四五	打とくまどき物	四五
右衛門の尉	四八	芥の柄	四八	いふく見まく	四八
げまね歌謡ふ	四九	げまの人ほむる	四九	大納言殿	四九
ふどの	五二	女親なくふり男	五二	定澄僧都	五二

とほつあゝ	垂	はしり井	垂	唐衣ハ	垂
裳ハ	垂	かざみハ	垂	織物ハ	垂
紋ハ	垂	衣の着様	垂	やまひハ	垂
心づきたるき物	垂	いひふくき物	垂	男女の品	垂
工匠の物くる	垂	物がさうせよ	垂	有明の月	垂
うしかひ	垂	獨むる人	垂	清げなる人	垂
ものけ	垂	やごとなきおほえ	垂	見苦き物	垂
枕こそハ	垂		垂		垂

標註枕草紙讀本目次 大尾



そり大いおき炭
など飛火するをい
へり。
ときさばくふハ
齋の産飯を屋根
うちあげしをあら
そひくふをいふ
十八日清水おハ世
不観音の目を十八
日とする事昔妙観
といふ人勝尾寺の
観音を十八人して
十八日おとしめ翌
月十八日不刻之終
りて其日不皆失せ
たるより國俗十八

標註枕草紙讀本卷五



佐々木弘綱標註

さきどろき物 二百六段

そり大い 板屋此うへおてからそのときさ
ばくふ 十八日清水おこもりあひたるくらう
成てまど火もともさぬほどふなりくより人の
きあつまりたるましてとなき所人の國たが
より家のぬいのびなりたるいとさきどろき
りきなどお火出来ぬといふさきど燃えハつら
ざりける 物もそと車のかへりさきどぐらど
ふいぐらるる物 二百七段

目を観音の目といへるよし。元亨釈書に見えり。

からゑの華の帯ハ、唐繪とまきゑふしたるをいひ、ひどりのあるまひハ、遁世の聖ハ、聊も世ふへつらふ心なくふるまふり、かいかしるなるを云、宮の幼ハ、巫祝の類なり、されハ、神ふおのつくり人ふを乳のりあるまひ、かんちりのちんの舎人ハ、近衛の将監以下、府生、武士等をいひ、此頃近衛の

女官どもものりみあげたるすがた。からゑのうその帯のうしろ、ひとまのふるまひ。

ことをなめげなる物 二百八段

宮のめれさいもんぶ人。舟こぐ者ども。かななるのぢんれ舎人。すまひ。

はりーき物 二百九段

いまやうのみとせごちごのいのりそらへたどする女ども、物のぞこひ出て、いのりれおどもつくるふ紙あまごおーりさねて、いとふぶきりたなして、きるさまひとへぶふつづくもええぬふはるおのぞと成ふれば、おのぐ口をさへひ

身威勢ふよりて、詞多れなるありしふや

すまひハ、七月相撲の節とて禁中ふあり、其相撲人をいふ、皆力者なれば、人を軽し多れなりしかるへし。物の具こひ出て、ハ、後の具ふすべき、残麻たとの類を、出るをいひ、おのぐ口をさへ云、ハ、頓き刀よて、カをいれて、ちきるさまをいひ、あてハ、垂也、木綿四手をされうくる也、かつハ、云くハ、巫女の自償のさまをいへるなり。

きゆぐめておしきりめおわう、物ども志でかけ、竹うちきりなど、いとかうぐあう、あてとらうちふるひいのるもどもいとさう、かつハ、何の宮れ、其殿の若君い、どうおをせ、をういのごひたるやう、ふやめ、奉ま、う、ろくおわく、ぬをま、し、る、ま、人、ぐめ、たり、れ、ど、志、る、し、も、あ、り、り、れ、れ、バ、今、ふ、女、を、あ、ん、め、す、は、と、く、を、え、る、ま、な、ど、か、た、る、も、を、う、し、げ、ま、の、あ、れ、女、あ、る、ト、志、ま、た、る、も、の、そ、ひ、も、を、う、し、ま、こ、と、ふ、さ、う、き、人、を、お、し、あ、ど、す、登、し、

上達部ハ 二百十段

いみじうおもしろい
いよいよ煩ひあひ
しをいふ也。
其人くハ、ウの陰陽
師この巫女かると召
されしうとの意也
今ふ女召すハ、我ま
をいへるなり。
ハとくをこるハ、ハ
陰を見るの意也。
志れたるものそひ
しハ、愚痴なる男ハ
そひあはる也。
おしなるとすべしハ、
賢き男をも押して、
さうしかるさまを
いふなるべし。
上達部ハ、公卿をい
ふなり。
左右大將ハ、左右近
衛の大將也。
宰相中將ハ、参儀ハ

春宮大夫。 左右の大將。 權大納言。 權中納言
宰相中將。 三位の中將。 東宮權の大夫。 侍
左宰相。

公達ハ 二百十一段

頭辨。 頭中將。 權中將。 四位少將。 藏人辨。

藏人少納言。 春宮のすけ。 藏人兵衛佐。

法師ハ 二百十二段

律師 内供。

女ハ 二百十三段

内侍のすけ。 かいし。

みやづらへ所を 二百十四段

て近衛中將を兼た
るをいふ。
公達ハ、執柄大臣な
との息をいふ。華族
とも法華ともいへ
り。
頭弁ハ、藏人頭ふて
并官を兼たるをい
ふ也。
四位少將ハ、相當正
五位下なるハ四位
小叙して其まゝあ
る也。長を叙苗とい
ふ。殊因ふるもの
なり。
藏人弁ハ、五位の藏
人ふて并官を兼た
るをいふ也。
律師ハ、五位小准す
る位官也。
内供ハ、内侍奉小同
し。

内。 后宫。 皇后をらね姫宮。 一品の宮。 高院ハ
つみふり々れどをらね。 ましてこの比をめで
たし。 春宮の侍母女侍。

身をかへて天人などをかうやあらんとみ

ゆるもの 二百十五段

たゞの女房ふてはぶらふ人の清めのとよなり
とる。 からまぬもきず裳をだよ用意あくるくぎ
ぬめてはまへふそひふして。 清帳のうちを所
みして。 女房どもをよびつらひつがねおひひ
やま。 文とりつがせあどし。 あるさまよひひつ
くまべくごよあらぬ。 ばふ志まきの藏人ふ成た

内侍すけハ典侍不
て四人相置後四位
尚侍不つける女官
也。
ないしハ掌侍もて
相當後五位六人也
内ハ禁中をいふ一
品の官ハ内親王の
はるかなるをいふし
言後ハ云々ハ經佛
をもいふて中子條
紙などいへハなる
べし。
まゝて此後ハ清
少納言の取ハ大納
言として選子内親王
きこえさうくおは
せし故なるべし。
はあふ云々ハ后宮
女侍などの清前不
て見ふさひふしあ
るをいふ也。

る。めでたし。こぞの霜月のまんだの祭ふ。みこと
もたりし人ももるえんば。公達ふつとてあましくハ
いづくなりし人ぞとこそおぼゆき外よりなり
たるなどハ。おなじりなれど。はしもおぼえんば。
雪ふる日 二百十七段
雪たうう降て今も猶ふるふ。五位も四位も。色う
るハ。う若やうなるがうへの衣の色いと。きよ
らふて。かそのおびのりたつきたるを。どのぬき
がふふひきをこえて。紫のゆきぬきも。雪ふたえ
て。こさまさりたるを着て。あこめのぬならんハ。
おどろく志き山吹を出して。からりさをゆき

つねねふハ。我局ふ
用子をいひやる也。
さう志きの云々ハ。
藏人所の雜色なり。
本負ハ人皆藏人ふ
轉るものなり。
こともしりしハ。
賀茂院時給ふ所の
雜色馬琴を昇くる
あるなり。
外よりなりたるハ。
雜色からて外の人
の六位藏人よなり
たるをいふ。
むらさきの指貫も
ハ。袍衣ハ指貫が
ハ。今衣冠といふ装
束なるべし。
あこめハ。袖ふて袍
の下小着るもの也。
おどろく志き山吹
ハ。色の花やりなる

るふ。風のいよく吹てよこさまふ雪を吹りくれ
ば。すこーうふぶきてあゆみくる。ふうぐつをう
く。こたなどのきいまで。雪のいと白くかゝりたる
こそをうーたれ。
殿上人 二百十七段
細殿のやま戸。いととうおーあけられ。清ゆど
のゝめどうよりおりてくる。殿上人のふえたる
なかりは。ぬきれ。いよくかころびさき。色々
のきぬどものこを。出さるをおーい。た。どし
て。北のぢんのう。こさまふあゆみ。あきたる
やま戸のまへ。をすぐとて。えいとひきこーて。う

をいふ山吹ハ表薄
朽葉小重黄ハるを
いふ
ふらぐつをうぐ
ハ深脊半靴なり
めたうハ馬道ふて
椽つゝきのるあり
えいを引こしてハ
濱原云さしぬまか
とのほころひしを
女房さち小見あふ
とらさんりをつら
しき小冠の櫻を顔
ふおひて還るふ
るをいふ
人のめおやハ母を
いふ也
くゑふちハ凶會日
ふて月毎ふあり
ふささしあるせれ
とさして君憚らね
バあるべし

かふふこぎてすぎぬるもをうし
こぎすぎよすぐる相 二百十八段
わあげさる舟 人のよハひ 春夏秋冬
ことふ人ふあらぬもの 二百十九段
人のめおやの老たる ぐゑふち
赤衣着たる見 二百二十段
五六月の夕ぐさき草をわそうう軽をくき
りてあうぎぬきたる思のちひさき笠をきて左
右ふいとおやくとちて好こそすぐるふをうし
くれ
ふとこがたの歌 二百二十一段

折敷のやうなる相
云くハ平ふて浅き
笠なるべし
おきふすやうふて
ハ田を植うるさま
をいへる也
郭公を望遠したる
けふうさふ也
郭公云くハ其う
さふ深也おれふハ
おのまよらやつハ
俗ふキヤツといふ
相ふて唯おのれと
いふ事の重河也さ
て淫の意ハ郭公よ
己のなきてそ我ら
ハ田ふ立出て苗と
ると也
いちなりし人り以
下文義詳ならず仲

賀茂へまうづる乃ふ女どものあたらしきま
まのやうなる相を笠ふきていと多くさてりて
歌をうさひおきふをやうふ思えて只何すとも
あくうろろさまにゆけをいなるふら阿らん
をりーとつるやどふ郭公をいとなめくうたふ
勢ぞ心うきふとこぎすふおれふかやつふ相を
なきてぞわれハ田ふさつとうさふふ聞もをて
むいりなりし人りいさくなきてぞといひらん
仲忠が童おひいうでおどす人と
警と郭公 二百廿二段
警ふ郭公ハおとれるといふ人こそいといつらう

忠云々ハ字津保物
活の仲忠すゞしの
優劣をいへる奈の
重出なるべし
ちこともそハ云く
ハ見の夜泣くそ見
ろしと也。そハのは
文字ハ助辞也。

さかへとりしり云
々ハ古今集ふきの
ふこそ早苗とりし
ういつのまふ稲葉
そよきて秋風のふ
くとある歌の意思
ひ出てけふと思へ
るなるをし。
やまげふハ一本ふ
すけとあり濱原

ふくぐれ管ハよるならぬいとわろしすべてよ
るなく抱ハめでしちごどもぞいめでさうら
ぬ。

稲うるさま 二百廿五段

八月つごもりぐうぶづまさふまうづとて見
れば穂ふかよる田ふ人おやくてさこぐ稲うる
なりけり。ちなへとりしりいつのまよとをまこ
とげふさいつごろ賀茂ふまうづとてえし。哀
ふもなりふける哉。是ハ女もまどらす男のうこ
手にいとありまいぬの。とといまきさうりもち
て。かこふり何ふりあらんとをまきるさまのや

云すけハ健氣の
意うといへり。
穂をうへふて云々
ハ稲の穂を上ふし
て持て田夫の並居
るハ何とてさやう
ふいするやらんい
とをうしと也。
いわりのさまハ田
を守る。宥ありこと
なるハ一本ふこと
なりとあり。
ふめくぢハ蜘蛛ふ
り。
ううしハ合子あり。
さ。物もお不えね
ハ。あまりふおそ
るし。けれハなるべ
し。

すふハ修法也。
思ふ人のハ我夫ふ

まげふめでよきふいとせまふく見ゆるや
いうでさすらん穂をうへよてなみをとるいとを
うしうえゆいりりのさまことなる。

いみどくきたかき抱 二百廿四段

なめくぢ。えせ板敷の帚。殿上のぐうし。

せめておそろしき抱 二百廿五段

よるなる神。ちうき隣よぬま人の入たる我ま
む所ふ入たるハ。さ。物とお不えねを何とも志
らず。

たのもしきもの 二百廿六段

心地あしき比僧あまそ志てずふふ志る。思

との灰ひて便なき
頃也誠小頼も一き
人ハ其友さちなど
なるべし

物おそろしきをり
云くハ幼きナとも
女などの両親の傍
ふ居たる時の類も
しき心をいへる也

ある人の云くハお
のうららの世ふあ
りし物話なるべし

いみどういひさ日
きハむこのあさし
心を恨むなるべし
まがくしきるとも
ハ呪咀なるといふ
なるべし

ふ人の心地何一きはまことにこのも一き人の
いびあぐさめこのめたる。物おそろしきをり
の親どもものうらいら。

人の心もちひ 二百廿七段

いとどう志たてゝむこ取さるふいと程あくす
まぬむこれさるべき所などよてあうともあひ
たるいとや一とや思ふらんある人のいみどう
時ふあひさる人のむこふなりて一月もをりぐ
ちりもここでやまふ一うバすべていみどういひ
ささぎめのとなどやうのものをまがく志きさ
どもいふもあるふそかへる年の正月に藏人ふ

かゝる中らひふハ
うく恨め一き中ふ
ハいうて聲のさめ
悪きやもあまかし
と思ふふなと、母か
どのいふを聲のき
くらんと也。
まうのうへの袴ハ
綾の表袴也。

忘れふ一人の車の
云くハうの見捨さ
る女の車の富尾ふ
男の半臂の裾忌緒
の引くくらん不ぞ
近くあると也
いうふ見るらんハ
忘れ女也。

なりぬあさま一うかゝるなりらひふいうでと
こそ人の思ひたためきたなどいひあつらふハ聞ら
んうらら月ふ人のハ溝志あひ一所ふ人くあつ
まりてまくにこの藏人よたさるむこれまうの
うへ此袴すまうがさねくろもんひなどいミド
う阿ざやりふてわをれみ一人の車れとみのを
ふまんひの者ひきりけつバうりみてあさりし
をいうよえるらんと車の人くも志りたるかぎ
りハいとほしがア一をこと人どもと津れあく
あさりし物哉あど後もいひき程男ハ物れい
とや一き人の思をんうハ志らぬあめり世の中

これてふ物狂り云
云ハ何さる狂人ら
さやうお憎まれん
とい思はんとの意
也。
志せんふハ自然也
ふき人の云くハ是
より親兄弟お思
るよりふき子をい
ふなり
目ごち見さてられ
ハ親なとふよく思
たる程の人ハ他
人も目ふして見
てふき人とい
たるとの意也。
見るひあるハ
容自行跡もよきを
いふ也。
ことなるふきハ

小猶いと心うき物ハ人ふあくまれん子こそ何
るべけれされこふおぐるひう。われ人よき思ハ
れんとお思はんされど志せんふ宮つうへふ
も親をらからの中ふてお思ハる。おもたれぬ
が何るぞいと侘しきやふき人の口子ハ更也。げ
まなどのやども親などのうなうする子ハめ
ごち見たてられていさも志うこそおがゆれ見
るひあるハ。ことと日り。いりご思ハざらんとお
がゆことなるふきハ。又これをうなうと思ふ
らんハ。親あまバぞうと哀なり。おやあも忍ふ
もすべてうちかさらふ人ふも。人ふ思ハれんバ

格別うろくらぬ
をいふ也。
男こそ云くハ。是よ
り男の女を思ふ
ふつきてあやしき
事あるをいふ。
おややけ所ハ禁中
をいふ也。

及ふましくらんハ
身お相應せぬよき
人をも美人と思
んをハ強ても思ひ
うけよとの意也。
女の目も云くハ
彼美人をすて悪
女をもつ男のあや
しき事ごちか
りいふ也。

うりめでふき子ハあらト男こそ格いと有ぐこ
くあやまき心地たるおハあれいとまよげあ
る人を捨てあくげなる人もたると何やう
し。おややけおふいりさちするをここ家の子な
どハ。あるが中ふらんをこそハえりて思ひぬ
をぬ及ぶまどらんまきをぶおめでたしと思
はんを志ぬバうりもたもひう。れう。人のむ
まめまぶお思ぬ人などをよしときくをこそハ
いうでともおもふな。且女のめあもわるしと
思ふを思ふハ。いりなるふり何らん。う。ちい
とよく心もをうしき人の。まもようかき歌をも

返りハさうらふハ男の返事ハ賢け
おまれと通さぬ也

おやけららち
てハおのうあつり
らぬ人の上の身を
傍より見きつて腹
たしう思ふ事也
俗ハいふ法界まん
きの法界といふよ
よくあされり
けんぞくハ眷属
て女の親類まての
意也
身の上まてハ男
の身の上へもて也
なけの例ハさして
思ひ入れていたぬ
例をいふ也

あハれふふておこせなどするを返りハさう
らふうちする相うらふりつりずらうさげハ
打あきてゐるを見捨ていきなどするを返り
らふおやけ腹さちてけんぞくの心地を心う
く見ゆべけれど身の上まてまつゆ心ぐるき
を思ひ志らぬふ身の上も情あるまハ男ハ
はらなり女もこそめでよくおやゆれあげの例
あまご切あ心おゆくいらねどいとやきまを
いとほしともあハをなるをバダヨいろ思ふ
らんあどいひけるをつとへてつさるハさしむ
うひていふよりも喜しいうで此人ハ思ひ志り

いうて此人ふ云く
ハ彼陰ことハ情あ
りたりいひなる嬉
しさを思ひ知りた
りといふ程の心さ
しを見せまやしく
思ハるゝと也
とりわられもせ
すハ取分て嬉し
も愛えずと也
さもあるまき人
ハとい思ふへき故
もあき人をいふ

人のうへいふを云
々ハ此段ハ唯無
ハ人の嗜いふ事
あるをあききと
無下ハ腹さつ人ハ
ふたつとのさ也
いうてハあらん
ハ我身をおきて人

けりともんえふらなごつ手よこそおやゆ
必思ふべき人ともべき人ハさるべきまなれを
とりわられもせむはもあるまどき人のゆ
いらへをも心やまく志さるハうれきわざ也
いとやまきまなれどまよえあらぬまぞうし大
うさ心よき人のまことハかどならぬハ男も
女もありぐさきまなめり又さる人をおやうる
べし人のうへいふと腹たつ人こそいとわりあ
たれいうでりハあらん我身とちおきてさバ
くりもどかしくいとまやきあやもあるされ
どなうらぬやうまあり又おのづうらき

の暗をいひとき者
はいりてうあらん
畢竟生無うていひ
出るなりと也。
されどらうらぬ
ハ併し人の暗をい
ふハ世無なりらふ
ろうららすとさち
うへりいへる也。
又おのつらう付
てハラの暗され
人の也。
又思ひをなつま
き云々ハ思ひ捨て
見放つまき人の
上ハたとひ思き
ありてもいと不
けさハ心は合点
て思ひていさす
の意也。
ささくなくハ思
ひ放つまき故も

つけてうらみもぞする。あいな。又思ひもあつ
まどきあさりハ。いと不いあど思ひとけバねん
おていそぬをや。ささくなくいうちいで笑ひも
志つべし。人の顔とりわきてよしとえゆるふ
ハ。さびごとくえれども。あなをうめづらしと
こそ覺ゆき。繪などハあまさたびえれば。めもさ
さずうし。ちううたてる屏風の繪あどハ。いとめ
でたぐれども。えとやられむ。人のうさちハをう
しうこそ阿れ。よくげなる。袷度の中も。一つよ
き所のままもらる。よ。えみくきもさこそハ。阿ら
めとねふこそわびく。な色。

あき人の上ハのさ
也。
めもたすハ。見さ
めするとのさ也。
よくけなる。袷度の
云々ハ。見よくき物
も。一所ハ。よき所
あるものなりとの
さ也。
ひとつを見てハ。一
の巻を見て也。二見
つけたるハ。さて二
巻目よ。かゝりたる
をいふ。おや。ある物
後以下一本。ゆり
しうとの思ふ。ふり
残り見出さる。さて
とあり。
いうたらんとハ。何
とあらんと心より
うる。愛を見たるを
いふ也。

うれしき抱 二百廿八段
まどえぬ抱がたりのおやりる。又一つをえてい
こトウゆうしうおがゆるものぐさりの二えつ
けたる。心おとりするやうもありし。之のや
りすてさる文をえるよ。おなぞつさあまさえ
つけさる。いりならんと。愛をえて。おそろしとむ
ねつぶる。よ。ことよもあらば。阿ハせあど志さ
る。いとらま。よ。まき人の情あよ人。あまささ
ふらふお。昔阿りりる。ふもあれ。今きこしめ
し。世よいひりることよも阿れ。うさらせあふを。
我は清賢。阿ハせ。そのたまをせ。いひきりせ。給

るもあらすハ凶
子あらずと占合せ
たる也。
我ハ此覽一あてせ
てハ我方貴人の
目を見合せて活
りきりせ給ふをい
ふ也。
身一やんことなき
ハ我身一とりて大
切なる人をいふ
口をうらぬ物一
ハ才徳なると惜り
らぬ者なりと不め
あふをいふ。
打関ハ関書の子也
不めらるハ一本
よりきりれらる
とあり。
自らの上ハハ我
身ハ歌不められ
るあふとなき也。

へるいとらき。遠き所ハさら也。おた下郎の
うちあがら身一やんごとなくおふ人のなやむ
をきいていりふくとお不つりなく歎くよおこ
たりくるせうそこえさるもうき。思ふ人の
人よも不めらるやんごとなき人などの口を
うらぬ物一お不りのあふ。物のをり。ハ人
といひりハ一たる歌の聞えて不めらるうちぎ
きたなど一不めらる。とづららのう人ハハあふ
あらぬ子なれどあおおもひやらる。い
う打つけたらぬ人のいひたる古き子のあらぬ
をさ出さるもうれ。後ハ物のなるあど一て見

古き子のあらぬハ
我ちらさうし故
也。
物のなるハ書物の
中より其故事を見
つけたる也。
歌のもとす急ハ歌
の上旬下旬也。

つけたるハをうう。たゞ是ふこそありけれと
りのいひりし人ぞをうき。みちの園がみ
白き志きしたぐのもあろうきよまきいえるも
うれし。もぐりき人の歌のもとす急とひた
るあふとお不えさる。われあがら嬉しつねふハ
お不ゆる子も。又人のとふふハきよくあれてや
とぬる折ぞお不る。とみふものもとむるふ
見出さる。只今見るべき文あどもとめうし
ふひて。葉の物をかへむぐ見たるふはういで
たるいとうれし。物あをせ何くれといどむる
ふかちたる。いりでううき。からざらん。又い

物あをせハ歌合繪
合等の類也。

我ハと思ひて云く
ハ我ハ人オたをら
られしと賢くお
る人オこそ有り
とるうれしとの
意で戯れのこと
りなり也
是がさうも抄ふ
堂の字也とあり或
云ふふて養なる
べしといひり養
なるとの如く去り
しをいふなり
いとつれなく
とをうられさる
の志らぬり不
るすをいふ也
つこそうらんと
人のあしきを悦
ふハ罪えんと思
ふらの意也
さしぐしむす
せ

みどろ我をと思ひて去りしが不なる人をうり
えさる女どちよりも男のまさりてうれし是が
たうを必せんむらんとつねお心づうひせらる
るもをうしきふいとつれなく何とも思ひたら
ぬやうあてたゆめをまをうし。みくきもの
れ何しきめ見るもつまはうらんとおひあがら
うれし。はしぐしむまばせてをうしげなるも
又うれし。あふ人の我身よりもまさりてう
し。あふ人と所となぐるるふ今のなりた
ればすこしとほき程もとあどあるるを
んどつけてこちと作られさればたあけて近

ハ指櫛をつくらす
るすなるべし
思ふ人ハ思ふ方
の為ふせしハ也
今のなりこれハ
邊参せしなるべし
此前ふ人々云々ハ
例のすさひの筆
て世の中の云々
り信少納玄の啓
る詞也
いきうせなまやハ
適世せんと思ふ
也
えつせハ人より
もらひしなる
かくても志を
紙を大切と思ふ
らに適世の心も
むと也
かうらいつりの
ハ高藤縁也

くめー入たるこそうれしけれ
まゝ拍仰らるついであどあも世の中のをら
どちよりむつうかど時あるべき心ちもせ
でいづちもくいきうせなまやとあふさ
紙のいと志らうきよらなるよきま
みちのくよ残あどえつせバかくても志バ
まぬべうりたりとあんお不え侍る又ううらい
づりのたみのむしあをうこまうよつりの
もんあざやりふくろう志らう思えたる引ひ
げて足れば何り猶さらふは世ハえ思ひを
まじと命さへをくなんなると申せをいみ

むしるまうハ邪
き表のまみたるを
いふ也。
いふもハかたき
すもハ皇居の清何
也古今集ハ我心慰
めうねつ更神や姨
拾山の月を詠てと
あるふよりてこそ
ふき給へる也。
そくさいのいのり
ハ残置とて命
のふるハやすき息
災の祈念そとの意
也。
残を二十八濱臣云
二帖をうなかきお
せるよりの涙うと
いへり。
きこしめしおきた
る事ハ残ふ命をの
ふときおきたれ

くハうなきも慰むなるかなをすて山の月
ハいうなる人のこるふうとわらハをあふはぶ
らふ人といみどくやまきそくさいのいのり
たるといふさてのちにむとてすろなる子を
思ひて里ふある比めでさき残を二十つ、みよ
つ、こてぬをせより作ふハとくまるまなど
のたまハせて是ハまこしめしおきたるふあり
しうばなんわろくめまバ壽命経とえうくまじ
げふこそや仰られたるいとをうしむげふ思ひ
忘れよりつるふともおぼしおらせあへりける
ハなほさゞ人ふてごふをうしましておろかな

ハと也。
己ちうんめまハ云
々ハ此残向く傳ら
ならねハ命のふる
慰めふもなるまじ
との意也壽命経ハ
延命の祈禱の経お
れハ也。
まとして愚あらぬハ
皇居の空すなれハ
なり。
かこき神ハ残を
りけたる也さて此
りみの験ふ千年も
せん也主君の給
へる残なれハけり
て申さんも恐多け
れといへり。
あまりふやハ眞加
おそろしき後なれ
ハとの意なるこし
まき単なるとハ祿物

らぬふぞあるや心もみどれてけいまぶきり
ともふられバ。
かけまぐもかこきりみのあるふハつる
此ふハひふなりぬぶきり
あまりふやとけいせさせあへとそまらせら
大むんふのざうしを遣使ふハ本なるあをまひ
とんあどぞとらせまことにはけりみをけうし
につくまでもてささぐにむつりきりもまぎ
る、心地しをうし心のうちもおぼゆ二日
バうりあてあうぎぬきたる男のた、みをもて
きてこれといふあれハ誰ぞあらハなりなるとお

なるべし。疊をもて来ては是清少納言の御ふりて后宮の給へるなるべし。まうりけりハ内衆などの御もて使ハぬりいみじとの意也。此座といふハ貴人のあたる疊也。さふやあらんハ后宮の給へるならん。と心中と思へとも。うせふたりハりの使のたや見えすなりふりなり。猶これ云くハ后宮の四方ふともまてもなく推るかやうの己さハせんとも。

をいしとあういへばさうおきていぬいづこよりむととハおれがまうりたりとそとりいれされバ。特更に此座といふと、これさまふてかうらいたまといときよら也。このうちハおふやあらんとおもへど。猶おぼつらふきに人ごもせしめとめさすれどうせふたりあやうぐりわらへど。つうひのおたればいふひなし。所さぐへたまどあらバ。おのづらも又いひふ来あん宮のりりふあない志ふあふらせまわしれと。程さきすぐろふはるわざハせん。仰ふあめりといまごうをうし。二日ハぐり音もせねばうさぐひもあ

うゝるふかん云くハ。我方へ推ともあく思もて来たるハ后宮の四方ふさる氣色ハ見給をさうしうとの意也。いみじう云々ハ左京の君の区す也。思ひもあるくハ推量の通りの意也。まといし程ハ其使のまとい隠れて改りしなり。

く左京のきまれもとふか、教こゝとたうんある。はるまやうしきんあひー忍びてあまさまのあひて。はねるえんぞハ。かく申たりともあもらし給ひそといひやりたるふいとドラかくさせぬひー子也。ゆめく丸がきこえさるとたぐのちふもとあれバ。されむよとおもひーもあるくをうしくて。文うきて又みそう不語あのかうらんふおらせし者をまどひー不どよ。やがてかきおとてとをこのもとよおちふなり。

積善寺の供養 二百廿九段

関白殿二月十日のやどハ法興院の積善寺とい

ふ清堂ふて一切經くやうぜさせぬふ女院とや
の清まへもおいはすべけれバ二月節日の不
どふ二条の宮へいらせぬふ敷ふけてぬふとく
かりみーらバ何事も見えぬつとめて目のう
らうみさし出さるやどみおきされバいと志
らうあくら志うをうげふつくりたるふみま
よりをどめてきのふりけたるおめり清志つら
ひ獅子こま犬たのどのふどふり入るやんと
ぞをうーき橋の一丈をうりふていとトウ嘆た
るやうふてみましのものとふあれバいととら
きたるうあ梅こそと今はうりあめと見えゆ

つくりたるなめり
ハ造花をいふ也。
うるさかりけんハ
うるはしきう也。
こいへなと云々ハ
小家ともをこち
てそこふ二条の宮
を俄ふつくられと
れハなり。

けちりく云々ハ假
の住所なれハさの
みけさうくハあら
ねとをうけなう
との意也。

うごもんりうもん
ハ登殿立役也。
あるらきりハあり
とある人皆着る

るハつくりたるおめりすべて花の白ひたをどは
きたるふおとらぬいうふるさかりなん雨ふ
らむ志がみあんうーと見るぞ口をーきこいへ
なまどいふおれおなりける所を今つくらせぬ
つれば本どちなごめ見えあるはいまどなまじ
ど宮のさまぞけちらくおろーげある殿わら
せぬくり何をみびのうごもんのはさしぬき橋
のなほしふおれ清ぞとつバうり只おほーう
さねぞなまりさるはまへよりをどめてぬ梅の
こきうをまきおりのうごもんぶらうもんあどあ
るうざりきたれをどひりりみちてぬらきぬ

也。女房ともを御覧しハ関白殿の見給ふ也。宮ふ云々ハ又殿の御也。后宮ふむひて何事云々ハ内衆ふ不足ハあるまじとの意也。なへすゑてハ並へ居ゑて也。よくかへり見てこそハ懸まひのさなり。つりひ給へとのさなり。

そとえぎ柳の梅などもあり。はあふるさせあひて。おあどゆえさせあふ。はいらへのあらまやしさを。里人あわづらふのぞうせをやとんまゐる。女房どもを御覧ト云々して。宮ふ何事をおぼしめすらん。こゝらめでさきんをふべまゑて御覧むるこそいとらやましけれ。一人わろきんかーや。是家くのむまめぞりーあをれ也。よくうへり見てこそさぶらをせあをめ。さてもはまのほんそびいろふ知まりてあつまりまゐる。あへるぞ。いろふいや志く抱をーみせさせあふ。まをて。我ハ生れさせあひーよりいみトうつらうまら

おろーのほそハ。おろしの水也。何らありうことふハ。うやうの述懐を何らハ陰ことふいそん今。前まてこそいそめとこそふれ給ふ也。まことそ云々ハ又殿の御也。大納言殿ハ伊周公也。いとゆるしき云々。又殿の御也。

あやうと見ええさめりハ。后宮のあやしと思召ならんと。色々色々えたりとの意也。くこしけあぐもハ。

きごまごおろーのほそ一つあをぬぞ。何ら志りうごとふをまきこえんあどのあふがをうーきふみあんとわらひぬ。まことそをこたりとてかくわらひいまするがをづらうーなどのあをまゐる。不どふ内よりほつらひふて武部のせう何ぐーまおれり。唐文ハ大納言どのとりあひて殿ふまらせあへ。バ。ひまきときて。いとゆる志き文うな。ゆるされ侍らバあけて見侍らんと。のあをすま。バ。あやあうとおがえさめり。うーごけなくもありとて。まらせあへ。バ。とらせあひても。ひろげさせあふやうも。あらバもて。ふさせあふ。清うういあ

和歌集 卷五

又殿の御帝の御文
なれハ恐多しと也
すこのまより云々
ハ使あるよとのさ
なるべし
ああままくりて
ハ又殿の御也。后宮
文と父君の前あて
開きうね給へハ使
の緑いひつけんと
てさち給へる也。
猶かうしも云々ハ
后宮の御ありさま
り沖美藤ならんと
ハえ推量すまじと
のさ也。

どぞあまうごきすみのみまより女房志とねけ
出て三四人の帳のものとふるよりあなうま
りりてろくのうおし侍らんとてさせぬひぬ
るのちふの文はらんむ返しのこうをいの残
ふのうせぬあがぬそのおなト色不自ひる猶
かうしもおしりりりまゐらする人ハあくやあ
らんとぞ口をきりふいこと更ふとて殿の
うごよりろくハ出させ給ふ女のさうぞくにぬ
梅のそそがそへたりけりなうとあれを酔さ
まやけきどりふそいみどきさうのりきふあが
君ゆるさせぬと大納言どのみも申てさちぬ

君達ちとハ殿の息
女さちちなるべし
三の御殿中の姫君
皆后宮の御妹也

うへかたきこえん
ハ貴人の妻と申し
てももろしうらん
わとおわきさうと
のさなるべし
いふせき心ちすハ
徳少御も物事れ
うちみて北の方の
見え給てさうし也
九ハ何う云々ハ哉
ハ何う用させん唯
あるまうふ任せん
かくいひとめて
おくなるべし
例の君云々ハいつ
もためらるる人

君達などいさどうけさうしぬひてさうをいの
ゆぞとをとらじときぬくるふこのゆまへハみ
くーげ殿也中のひめ君よりもおわき不見えぬ
うてうへたときこえんふぞよりぬるうへもわ
たらせぬへり。ゆれ帳引よせてあさらうくまゐ
りたる人ぐふハ見えぬをぬべいぶせき心ちす
さしつどひてりの目れけうぞく扇などのうを
いひあハするもあ又いどみるをして九ハ何々
只あらんふまうせそをあどいひて例の君あど
にくまるまさらりよりづる人とおわくれどか
おるにまらづればえとぐめさせぬはずうへ日

枕草子 卷五

ふと傍董のいひふくむ也。
まうつるハ里より退出するをいふ
うへ日ふハハ母北の方をいふ也。

あきてはうれんハ松尾集ハ花露ハぬれさる色見ればなきてはうれんハそこいきとある歌のこなり。

日ふわたりふるもおひーます君ごちあどおを
それたゆあ人もくあく候いねをいとよし肉の
清つうひ日くふまあるゆあ色の櫛色ハまさらで
日などふあさりてあがみさうなるごふ侘し
きふ雨のふるふりたるつとめていみどうむと
く也いとくたきてたきてはうれんがふふ
おとりこそす也といふをきうせあひてがふ雨
れ々もひあゆるぞうしいうならんとておどろ
うせあふふ殿のゆうさうさふらひのものと
もげまあど来ておまご花のふとふさうふりふ
ふりて引さふーとりてみそりふいきてまごく

いとをうくしてハ殿のようきして花のあーくならしを
取らせ給ふを感ずるさ也。
いこいこなんハ後撰集ハ山守ハい
もいそなん高砂の尾上の様をうて
かさうんとあるをいハ此ハ素性の秋
なるを兼澄りすと
いハるハ其集ハも
あるハや
くきともハ一本
ハ枝ともふとあり
まうつれつきハ一
本ふまうつれつき

らうらんふとれこそおやせらまつとあける
ふりふびんなるわざのあつとくすとふしと
るふいとをうくしていたゞいたあんとあねず
みぐすをあひたるふやともふき人ならバいた
まやーたれどかのむねまむ人ハとをぞあーり
めりといへばわらひていとあげてひきもて
いぬ猫とのハゆもをうーうおをすかーくき
どもふぬれまうれつきていりふんるうひな
うらましとて入ぬかもんづうさまありてゆ
かうー参りとのもりの女官ゆきよめまありハ
てーおきさせぬへるふ花のあられをあたあさ

とあり。いりふこるういおからましと見てい一本ふいふひんなまきうごちならましと思ふともかくもいとてとあり。あな浅ま一云々ハ后宮の由也。さも侍らすハ見侍らすと也。以下清少納言の啓する詞也。さりとも云くハ又后宮の由也。いでふも侍らし云々又清少納言の啓する詞也。春風の志て侍りな人ハ春風こそ花のあさなれハそれら志侍りつらんとも也。やさき細なるるべ

まじりのををいづちいよらると仰せらる。あつつきぬま人ありといふなりつるハ。猶枝かどをすこーをるふやとこそまきつまたう志つるぞ。んつやと仰らる。さも侍ずいまごらくてよくとん侍らざりつるを志ろきたる抱の侍れを。花をとるよやとろちめささふ申侍りつると申せ。さりともかくハいりでうとらん殿のうくさせあへるあめりとてわらせあへば。いでよも侍らじ。春風の志て侍りあんとけいをもるとか。くいもんとしてりくまなりなり。ぬまみふハあらで。ありふこそあるわたりつれと仰らる。もめつ

し。かくいんんとてハ。又后宮の由也。春風のせしといんんとて隠すうとのさ。ふりふこそ云くハ。雨の志こそ花のあさなれハそれら志侍りつらんとも也。やさき細なるるべ。ぬくたれの朝顔ハ。ねくれ髪につくるをぬり不也。さて時ならずハ朝顔といふるより。春なれハ。つけたる也。されと云々ハ。清少納言の詞也。我見付けさるさきふ殿こそ知らせ給んとのさなり。

らききみならねどいみどうめでさき殿おハ。ませば。ねくこれのあさぐねも時あらげや。はらんぜんといいらる。抱ハ。ますま。に。かの花うせふなるハ。いりふかくハ。ぬすませしぞ。いぎさ。かうりける女房達うな。志らざりけるよとおどろろせあへば。はれど我よりさきふとこそあひて侍るめりつれと忍びやうに。いふをいとさくま。つ々させあひて。さおもひつる事ぞ。世よこと人出てん付ト。宰相とそことの不どならんと。おハ。いり里つとして。いみどうわらハ。せあふ。さりげなる抱を。少納言を。妻うせふおせらると宮

さ思ひつるい又殿
の詞也。
さりけたる物とい
后宮の詞也。
そらことを云く又
后宮の殿ふの給ふ
詞也。
山田もつくるらん
ハ貫之集ハ山田さ
へ今ハつくるを散
花のかことハ風ふ
おせせならんと
あるをいふ
さてもねさくハ殿
の詞也。
かゝる忘れものハ
うやうのうつけし
ものゝあるハある
おかひなしとみま
也。
春風ハ空ハ清少
納言の詞を感あ

の清少ふうち急ませあへるめでたしそらごと
をおせ侍る也。今ハ山田もつくるらんとうち
ずんぜさせあへるもいとなまめきをうし。さて
もねさく足付られふなる哉さばうりいましめ
つる物を人のおふかゝる忘れもの此あるこそ
とのたまハす。喜風をそらふいとをうしうもい
ふりなとむんぜさせあふさごとふさうるさ
くおもひよりて侍つうしけされさまいりふ侍
らましとそわらハせあふをこわり忍されどそ
れハいととく足て雨ふぬきこりあどいひ侍り
つと申あへばいとどうねさがらせあふもをう

る也。
さゝことふハ云く
ハ后宮の詞也。
こころ君ハ伊周公
の皇子道雅の幼名
也。漢臣云幼穉の時
の尊称もて。准上よ
もいふなり。卷十一
ハ此君の名を松君
といへり。
されとそれハ云く
ハ小権君の詞なり。
清少納言とく見付
てなまきて見られん
顔ふなといへり
也。
今少し近うハ后宮
の詞。秋善寺へめ
啓近つきてのま也。
花の心云くハ后宮
よりの清息也。白
氏文集ハ二月東風

し。さて八日九日のむどふまりづるを。今すこし
近うあしてあど侍らるれどぬい。いとどう常よ
りもあふふてりたるひるつう。と花の心開けた
りや。いりづいふとのとまをせたれを。秋ハあど
く侍れどよあつてあんのぶる心地。侍るあ
ど聞えさせつ。おさせあひ。鞍車の次第もあく
まづくとのまさこくぐあくられ。さるべき人
三人と。鞍は車ふのるさま。これいとさこぐ。く。衆
れ。及さなどのやうに。とふれぬべくまどふいと
足ぐるし。とさばれのるべき。車たなくてえまる
らずハ。おのづらきこりめ。つけてとまをせ

来堂折花心開恩君
春日暹一夜腸九回
又万葉ふ久方の月
夜を清み梅花心開
けて吾おもへる君
ともあり。

秋ハまさしくハ同
古俗の詞ハ九月西
風無月冷霜華凝思
君秋夜長一夜魂九
升とあるを春なれ
ハらくいへる也。
此ハひなんハ九度
なんの誤なるを
次第もなくまのま
つとハ女房達の我
先ふとささく也。
いと見ぐるしハ一
本お見くる志き小
とある方然るべし
おしこりてハおし
うままりて也。

てんなど笑ひ合てさてるまへよりおしこりて
まどひのり果て出てかうりといふふまざこゝ
ふといらふまを司よりきて誰々うおをすする
と問ひていとあやうりけるま今ハ皆のり
ぬらんとこそ思ひつれこハかどてりくハおく
れさせ給へる今ハとくせんをのせんと一つる
あめづらりなるやなど驚きてよせさすまざさ
ばまづ生志あまつらん人をのせあひてつぎ
ふもとといふ聲付てねーからず腹ぎたあくお
ハ一たりあどいへぞのりぬ生次よハ涙あまづ
ーが車よ阿れを火といとくらまきを笑ひて二条

かうかしくハまじ
りとのま也。
とくせんハ得選也
さばまづ云ハ清
少納言の御みてさ
らハ先其衆せんと
思ひ得選をのせ
ふと也。
けしらす云々ハ
官司の御清少納言
のぬちけたるさま
みいへるをいふ也
笑ひてハ一本ふじ
ひてとあり。
こゝまよべハ后宮
の清少納言をめす
也。
いつのままみかうハ
云ハ二条のりり
宮又居つきたるや
うは思われしを感
する也。

の宮ふ糸りつきたりみこハとく入らせあひ
と皆志つらひるさせ給ひたりこふまづと作
せらまむま右京小左近などいふ若き人々糸
る人ごとふそれどなりりたりおるに志さか
ひ四人づゝ清少納言ふまありつどひてはぶらふよ
いりなるぞと作せらまけるも志らぬある限お
り果てぞからうとて足付られてがばりり作せ
らるゝふハなまどりく遅くとして引めて糸るふ足
ればいつのままみかうハ年比のすまひのさまふ
おハいまいつきたるありとをういりなれば
かう何りと尋ぬばりりハ見えざりつるぞと作

いふたれハ云ハ
后宮の仰こと也
もろともふ乗りた
る人ハウのおくれ
ふる三人也
さいさてハ最終の
さ也

りする者ハ車の
奉りとり也
心あらざらん者云
々ハ心志らぬ者こ
そ人々みさりふ乗
車すしてそを制す
るのみも遠慮すべ
々れ右衛門などハ
判せよとせしと仰せ
らる也
きくらんときこる
ハ一本ふきくらん

せらるゝふとりくも申さねバ諸をふ乗たる人
いとわりなきさいさての車ふ侍らん人ハいり
でりとくハ糸り侍らん是もむむくえのるまじ
く侍りつるをみづーがいとほしがりてゆづり
侍りつる也くらう侍りつるもこそ候しう侍り
つとと笑ふくけいもるふりする者のいとあ
や志き也又などりハ心志らざらん者こそつ
まめ右衛門あどハいーうーなど仰せらるされ
どいりでらをしりさま立侍らんなどいふもか
たへの人みくーときくらんときこゆさまあ志
うてかくのりたらんもかしこうるべきさうりハ

らしとあり
さまあーうとて云
々ハ人々のみさり
ふ乗りこるもよき
ふあらず車の前後
定法の如く正しう
らんこそよらめ
と云

物しけふハ機嫌
あきさま也
おり侍る程の云々
ハ侍少納との御お
のせ局ふおり居る
程の入りさみ人
々侍りねて乗車せ
しからんといひと
く也
裳の腰さしハ縫付
なとすのさま也

有げさげふぞハ明
目を第一の晴と髪

定めたらんさまのやんごとなうらんこそよ
らめと物しげと思召たりおり侍るなどの侍ま
みくるしきみよりてふやとぞ申しなほす清経
のここと明日わらせおハーまさんとてこよ
ひまるりたりみなまの院の北おとてみさーの
ぞきたまバ高つきどもふ火をともして二人み
たりふたり侍るべきどち屏風ひきへどてつる
もあり几帳ふらよへどてたるも阿里又侍らで
もあつまりるてきぬどもとちうさね裳の腰さ
しけさうずるさまを侍らよもいをむかみなど
いふおハ明日より後ハまぐさげふぞ見ゆる宮

松平 綱誠 巻五

をけづりつくらふ
さまなり。
給へるなりハ一本
お給へるなるとお
る方よし。
扇もたせて云々ハ
只情少納言を尋ね
て人の扇をおこせ
たりと也。
まてまことと云ハ一
本みさして云くとあ
り。

三四の君も、后宮の
清妹とち也。

の時みなんわらせぬへるあり、なぞり今まで
まゐり給へるなりつる。扇もたせく尋ねきこゆる
人ありなぞ津ぐまで、まことと云はらの時りとさ
うぞきたちてあるふ、あける日とさし出ぬ、西の
對ののらびさしみなんさしよせてのるべきと
て、あるりざり渡殿へゆくもどふまじりひく志
きなどなる今まゐりどもハ、いとつゝまじりげか
るふ、西の對ふ殿もまよせぬへ、バ宮もそこふお
ハ、まじりてまじり女房、車ふのせさせぬふを、後覽
ずとて、みまのうちふ宮、志げいとや、三四のさま、
殿のうへへ、清おとらりと三と、ころとちあみてお

打ひれてたよ云々
ハ、皆一度ふのらハ
まきれてもあらん
をとおまゐりあらハ
みて、恥うしりりし
をいそんとそ也。
かきとてハ、書立也。

髪もどもあがりや
すらんハ、物の身ふ
をみておぼゆる時
ハ、毛のよごつ物也。
こハ、あまり恥し
さよぞつとするを

ハ、ます、東の左右ふ、大納言、三位中将二不して、
すざれうちあげ、下すざれひきあげてのせあふ、
皆打むきてごふあらむ、くれふやあらん、四人
づゝかきとてふあさぐひて、それくとよびとて
てのせらも奉りあゆみゆく心地、いそらうまこ
とよ、浅ましうけせうありともよのほね也、みま
のうちふそこらの目どもものならふ、宮の、
のえぐる一と、後覽せんハ、更ふ侘一きまじり
なまし、才より汗の何ゆればつくろひよとてよる、
などもあがりやまらんとおぼゆるうらうじてる
これバ、車のもといふ、いそらうを、けりげよ、清げ

枕草子 巻五

也。されとふれすハ、耻しさふおもむ心ちもせはごろびぬへりしをさふんもせのさ也。志ぢハ、榻也。

院ハ、東三條女院也。

なるゆさまども志て、打忍みて又あふも現からむされどたふとぞ。そこまでいいきつきぬること。うーこき顔もなきうとおがゆとど。皆のりをてぬまバ、引出て、二條の大路ふ。志ちさて、お見車此やうふて、立ふらべとるいとをうー人もさえるらんうーと心ときめさせらる。四位五位六位などいこむうおやういでいり。車のもととよ来て、つくろひ抱いひなどをす。まう院の馬むうへよ。殿をまじめ奉りて、殿上と地下と皆まるりぬ。それわさらせあひてのち、宮ハ出させ給ふ。志しとあはせバ、いと心もとなうーと思ふ。ふどふ。目さーの

おもしますハ、女院の出也。はまごめハ、女院の車とくもハ、院方の車也。

かざりのうそぎハ、すしふて、裏表あるをいふ也。

がりてぞおハーます。は車ごめハ十五、四ハ尼車。一の馬車ハからの車なうぞ。それふつゞきて尾の車。志り口よりするさうのず。薄墨のけさきぬなどいみどくて、すざれハあげず。下すだきもうま色のまをすこーこきつぎふ。さゞの女房の十。櫻のうらきぬ。うすいろの裳。おをわさし。かど里のうそぎどもいこトうなまめ。うー。日ハいとらうなれど、空ハあさみどりふかすみわたる。ふ女房のちうぞくの白ひあひて、いみどきおり。おの色々のうら衣などよりもあまめ。うしうをうーきりきりかし。白殿をいつぎれ殿

柳葉 柳葉 柳葉 柳葉

此車ともハ后宮方の車也。

出させ給えハ一本出させ給えんごり。

くさいハ裙帶也。

豊前ハ東女の名也。

指貫をきたれハ豊前ハ女房も馬のり時ハ指貫をきたる也。色ゆるされふけり

をら。おをするうぎりもてり。つぎ奉らせあふ。いとどうめでさ。これら又奉りさ。此車ともの二十立ならびたるも。又をう。と又ゆるんか。いつ。う出させあ。あど。まちきこえさ。ま。ふ。い。う。あ。ら。ん。と。心。も。と。な。く。お。も。ふ。ふ。う。ら。う。お。て。う。ね。め。八。人。る。ふ。の。せ。て。ひ。き。お。づ。め。り。ま。ま。を。ご。れ。裳。く。さい。ひ。れ。あ。ど。の。風。ふ。吹。や。ら。れ。た。る。いと。を。り。豊。前。とい。ふ。東。女。を。く。ま。し。志。げ。ま。さ。が。あ。る。人。な。り。え。び。ぞ。め。の。お。り。物。の。さ。し。ぬ。き。を。着。さ。ま。ば。志。げ。ま。さ。ハ。色。ゆる。され。ふ。け。り。と。い。ふ。の。井。此。大。納。言。ハ。わ。ら。ひ。あ。ひ。て。皆。の。り。つ。づ。ま。て。

ハ蒲葺漆の織物の指貫きたれ也。

清綱をりてハ。清綱の序綱を張る也。頭の毛ちと云々ハ。感深きときハ。髪のこと。のさ也。

さて髪云々ハ。髪のこと。ちて。な。て。つ。け。し。も。も。そ。け。て。あ。しく。な。り。な。ら。ん。を。人。々。う。こ。つ。し。と。也。かし。こ。う。招。ふ。ゆ。る。ハ。一。本。ふ。か。し。こ。う。

たてるに。今ぞ。色。こ。し。出。させ。あ。め。で。た。し。と。見。え。奉。り。つ。る。は。あ。り。さ。ま。ふ。是。ハ。く。ら。ぶ。べ。う。ら。ざ。り。たり。顔。目。を。な。ぐ。と。は。あ。が。る。わ。ど。み。本。の。葉。此。いと。花。や。う。よ。う。ぎ。や。ま。て。と。こ。の。う。ら。び。ら。の色。つ。や。な。ど。さ。へ。ぞ。い。と。き。は。つ。あ。を。り。て。出。させ。あ。ふ。は。こ。の。帷。子。の。う。ち。ゆる。ぎ。た。る。程。ま。こと。に。く。ら。の。毛。あ。ど。人。の。い。ふ。も。更。み。そ。ら。ご。とな。ら。ず。お。の。ち。ふ。あ。ら。ん。と。か。こ。ち。つ。べ。し。あ。さ。ま。し。う。い。つ。く。う。程。い。う。で。あ。る。は。あ。ふ。な。れ。つ。う。ま。つ。る。ら。ん。と。我。身。と。か。し。こ。う。お。ぶ。ゆる。は。こ。し。さ。せ。あ。ふ。不。ど。車。の。志。ぢ。ど。も。人。

そ云々とあり
人まひハ副車也

大門のもとは秋善
寺の大門也

こまもろこしの樂
してハ樂不葛藤の
樂唐の樂とてある
也

あげぐりハ和名鈔
不唄阿計波利大帳
也とあり

へいまんハ屏慢
て幕の類也

ゆさじきふ云々ハ
辰宮の核敷ハ女
房の車をせし也

乗つる所と云々
ハさきハ乗車せし
所さへなれり
うりしふは所ハ又
それうりも顯証あ
るふの意也

色の黒さ赤さハ髪
の毛の色なり

ちりそらせ給へ云
々ハ尻ある女房の
伊周公ハ申す例也

うりおをしてハ伊
周公の傍少納その

ごまひみかきおろしたりつる又牛どもうけて
みこしの志りふつゞきたる心地のめでさう無
あるまさまいふうさとしおハ一ま一つきこれ
バ大門のもともこまもろこしがく志て獅子
こま犬をどりまひさうの音つゞみの聲おおも
お不えむこハいづくの佛の西國あどお来ふけ
るふり阿らんとまふひゞきのなるやうにお不
ゆ内ふ入れぬれバいろくの錦のあげをりふみま
いと書くてかけ渡しついまんあどひきたる不
どなぶてとゞおは世とお不えむ西さトきふさ
しよせたれバハ殿をら立あひてどくおりふと

のたまふのりつるあどおありつるを今すこ
ありうけせうなるお大納言殿いとお々志くき
ふげふてお志さうさぬの志りいと志くおせげ
あてすゞまうちあげてをよとのあふ津くろひ
そへさる髪もくらしきぬの中までふくごまあや
志うなりたらん色のくろさあさけへ見えり
れぬべきわどなるがいと侘しれむあともえ
おりむおづ志りあるこそハあどいふおどもそ
れも同じ心よや志りぞらせぬへうさドけあし
あどいふをぢあふらあど笑ひて立ちつりから
う志ておりぬれバよまおハしてむねさうあど

掛
草
終
五

方ふり来て也。
むねさうたうふ云々
ハ伊周公の初宮
の作こころを承りて
来りしをの意也。
さきこえ云々ハ后
宮のまことハ伊周
公ふ作られしあら
んと思ふものまこと

こゝふさちうくし
ふ云々ハ伊周公の
初立うくしてこれ
てあてまありしと
のまこと抄説恐らく
ハ能あらん。

ふ見えでかく志ておろせと宮の作せらるれを
来たるふ思ひぐまふきとてひきおろして
まゐりあふさきこえさせぬひつらんと思ふも
うとドけあまゐりたれバをじめおけける人
どものおれ見えぬべきはハ八人をうり出る
あたり一尺と二尺バウりの高さの赤がりのう
へふれをします。こゝふさちかくしてゐて集り
たりと申しぬへをいづらとて凡帳のこあふ
出させぬへままごからのゆども奉りたがらお
はしますぞいみどきの法どよろしうらんや
中ふらあやのゆれゆえびぞめの五重のゆ

ざうらんハ象眼唐
衣の名也又細き泥
繪なととる也と
抄ふいへり谷川氏
云うすもの名也
我をハいう云々
ハ后宮の傳行啓
のたの程の儀式の
事也。
久しうや云々ハ又
后宮のゆゆ出法の
遅りし故をゆ物
活し給ふ也。
殿の太夫ハ藤原乃
名公也。
同し下襲云々ハ女
院の供奉あて人ふ
見られし同し下襲
をきて又后宮のゆ
供ふもまあらんハ

ぞふ赤色のうられゆぞ地ずりのうられうす物
ふゆらんりさねと敷傳裳など奉りたり。おり
ゆれ色更ふなべて似るべきやうあし我ををい
りぞとるとおせらるいみどらんさぶらひ
つるたどもことお出てハよのつねよのまこと
久しうやとつるそれを殿の太夫の院のゆ供よ
きて人よ見えぬおたご下がさねながら宮の
ゆ供ふあらんわろしと人思ひなんとて。こゝと
下がさねぬハせぬひるをどふおそきありけ
り。いとすきぬへまあごと打わらハせぬへるい
とあきららりよをれさるふを今すこしけざやう

九
草
氏
卷
五

人目よりしとそ
まひひハ和名抄
お蔽髪は太露蔽髪
前飾也とあり
さいしハ筭子也

長さまふ云々ハ
く縁をとりたる也

おめでさう。おひひさひあげさせぬるさい。お
ひひけめのぬぐしのいさ。うよりて。志るく。見
えさせぬ。おなごさへ。ぞ。きこえん。う。さ。あ。き。こ。尺
の。清。き。ち。や。う。一。ふ。ろ。ひ。を。さ。し。ち。が。へ。て。こ。な。ご
れ。へ。ご。て。お。ハ。志。て。其。う。し。ろ。み。を。さ。し。み。一。ひ。ら
を。な。ご。さ。ま。お。へ。り。を。し。て。お。だ。し。の。上。お。志。ま。き。て。
中。納。云。の。君。と。い。ふ。を。殿。の。御。伯。父。の。兵。衛。れ。う。み
ご。ま。き。よ。と。き。こ。え。ける。が。お。む。ま。ぬ。宰相。の。君。と
ハ。富。小。路。の。左。大。臣。の。清。孫。それ。二人。ぞ。よ。よ。お。て
見。え。ぬ。お。見。覺。ド。わ。く。し。て。宰相。ハ。あ。た。さ。ふ。お。て
う。へ。人。ど。も。の。お。る。所。い。きて。見。よ。と。仰。せ。ら。る

く、お三人云々ハ
宰相の洞中納言と
宰相とほ少納言と
三人あらんと也
殿上ゆるさる。云
々ハ。是ハ。童。殿。上。な
とのなる官也。清少
納言の召上られ
るを内舎人お唯へ
ていふ也
うまさへハ馬副童
也
そこへ入居て云々
ハ。清。少。納。言。の。心。の
り。ち。お。思。ふ。や。り。也
の。る。事。ハ。う。く。我
身。の。面。目。な。る。事。を
也
ふきぐさ。りハ。濱。居
云。今。俗。ふ。い。ふ。吹。聴
の。吹。の。義。う。とい。へ
り。

る。お。心。得。て。く。お。三。人。い。と。よく。見。傳。り。ぬ。べ。し
と。申。せ。ば。さ。ば。と。て。め。あ。げ。さ。せ。ぬ。ハ。志。も。お
る。お。る。人。く。殿。上。ゆる。は。る。内。舎。人。な。あり。と。わ
ら。ハ。せん。と。思。へ。る。う。とい。へ。ご。う。ま。さ。へ。の。や。ど
ぞ。な。ご。い。へ。バ。そ。こ。よ。入。る。て。見。る。ハ。い。と。お。も。ご
ご。う。う。お。お。る。事。を。い。何。か。ら。い。ふ。ハ。ふ。き。が。こ
り。あ。も。あり。又。君。れ。ぬ。と。め。あ。も。お。る。ご。志。う。が。ハ
う。り。の。人。を。さ。へ。お。お。し。らん。お。お。の。づ。う。ら。お
し。聖。世。の。中。も。ど。き。お。と。する。人。ハ。あ。い。か。く。か。し
こ。ま。お。る。事。ふ。り。う。聖。て。う。と。ド。け。あ。れ。ど。あ。お。泰
き。ご。う。な。ご。ハ。又。い。り。ぐ。ハ。殊。よ。身。の。程。さ。る。事。も

初巻
終巻
五

又いりてハ、主君の召上らるゝ人のおもそくを憚りてあらおそれるまじと辞退申さんハ又いりてあれハのまじ。

てうどを真ひてハ、武官の調度あてり、籠なをきりふ。

入らせ給ひてハ、関白殿の后宮のほうへあり。

今いらへハ、今以来あていらいなるへ

ありぬべし。院の北さどき、所々のさどきども見わさしたるめでし。殿ハまづ院の北さどきあまるりたまひて、志ばりあてこ、あまありぬり。大納言二所、之位の中將ハ陣近うまありたるま、あててうどをおひて、いとつきぐ志うをうしうておます。殿上人四位五位こちさう打つきて、清供おほひなみるさり。入らせあひて、見奉らせあふ。女房あるかぎり、裳のうらきぬみくしげ殿まできこまへり。殿の上ハ、裳のうへふ。ふりちきをぞきあへる。繪ふりきたるやうなる北さまどもこのな。今いらへ今日ハと申しあひそ。三四の

しさて此後おありて、今日ハうく窮屈ある目見しと申し給ひそと也。皆裳履衣あて行儀正しき故なり。

此舟のま君云々ハ、この中ふハ、后宮こそまよ上りておませと也。

あういろ云々ハ、清少納言のさま也。法服云々ハ、關白殿の戯れて清少納言の赤衣を法服おるへき物をと也。

さやりの云々ハ、清少納言のきぬのやうなる物をきり調せんとの言也。清僧都のよやハ、伊周公の清少納言の

君れ清裳ぬがせあへ。はなりのま君ふハ、おまへこそおハいませ。ゆさどきれまへ。ふぢんをす急させあへるハ、たがろげのまうとて、打なうせ給ふ。がよとみる人も涙ぐまきふ。あういろさくららの五重のうらきぬを着たるをぬらんとて、法服つくごりさらざりつるを、俄よまどひ志つるふ。これこそをかり申すべり。くれさらバもじ又さやりの物をきり志らめたるふとのあをせるよ。又わらひぬ。大納言殿すこし志ぞきぬあへるがき、あひて清僧都のふやあらんとあふ。ひとこと、志てきううらぬるぞなきや。僧都

虎
卓
氏
巻
五

初巻五

みぎをされていひさる也赤色の衣を服ふらん殿のさそふれしふりて也
僧都の君ハ隆田也
がさちハ菩薩也
僧綱の中ハ云々ハ
僧正僧初律師を僧綱といふ也さて僧初めてましませを僧綱の中ハ威儀を正しくあてこそおそさめし隆園ハ女房の申すさそふれ也此時隆園をさかうりしなるべし
侍ふりハ父の大納言殿の侍をさるてゆく也
みはトまりてハ法事也

の君あり色れうま抱のゆころも紫のけさいと
うすき色のゆぞどもさしぬききめひてがさち
のゆやうよて女房ふまトまあまきあふもいと
をうし僧綱の中ハ威儀具足してもおかいまさ
でえぐるしう女房の中ハなどわらふ父の大納
言殿ゆまつよりお君を奉るえび深のおり抱
のふらしこきあやのうちさるお梅のおり抱な
どきあへり侍の四位五位いとおふりゆさト
きふ女房の中ハいれ奉る何事のおやまりより
泣のふありあふさへいとをえぐしゆをさまり
て一切経を蓮の花にありきふ一そふづよい

一切経を云々ハ一蓮小經一卷つゝ入れて也

あぐらハ胡床也腰
うくる床の類を
いふ勅使の座まう
けたる也
やうてよさう云々
ハ室者の詞也
猶りへりて後ハ則
理禁中へ返りて後
入ぬあらんと也
いらせ給ひなとま
ハ一本小給ひたる

きて僧俗上達部殿上人地下六位何くともまでも
て渡るいみどうさふとし大坊乃導師まあり急
うう志バしまちてまひなどをみる日くらし見る
ふ目もたゆくくる志う内のゆつうひふ五位の
藏人まありたりゆさトまきの前ハあぐらたて
るさるおどげふぞ移めでさき夜さりつうさ式
ゆのせうのりまさまありたりやがて救さりい
らせあふべしゆ供ふさぶらとせんと侍りつ
としてうつりもまゐらず宮ハ猶りへりて後ふと
のめをすまども又藏人の辨まありて殿よとゆ
消息あきを只仰のまるとしていらせあひなとす

九草氏巻五

枕草子 卷五

とすところ方然る
ぞし
ちちの志ふらまハ
陸奥の千賀の塩竈
ちちなうらまきハ
人ふあそぬなりけ
りとおるさよて女
院居宮と近く在し
なうらら対面ふき
子をいへる也
ずさともハ後者と
も也

きふく見えすハ今
いふさつむり見え
すのさ也

とたつるごとくもハ
後者を忘るる例の
皆同じやうみて唱
ふる如くのさ也
更りすくせハハ我
前世の果報見ゆと
悦び給へる也

九条錫杖ハ不空三
藏の作一卷あり是
みふしそりせを付
て終ぬみすまうく
朽とて門ハ古今
集ハ我宿ハ三輪の
山本恋しくハ訪ひ
来ませ朽とて門
とある歌をいふ
風俗ハ風俗のう
ひ物とそあり

院の清さどきよりちちの志不がまたなどやうの
けせうそこをうーき物などもてまありらふひ
たるなどもめでたしうをて、院へらせあふ
院司上達部などけさびハりさつどつうりまつ
りあひける宮ハ内へいらせあひぬるもあらば
女房のずさどもハ二条の宮よぞおハーまさん
とてそこよみかいきるてまてどく見えぬやど
ふ敷いさう更ぬ内よそとのるおもてきたらん
とまつふきよく見えぬあざやうなるきぬの身
ももつうぬを着て寒きまゝふふくみ腹どてど
かひあしつとめてきたるをいりよかく心なき

ぞなごいへバとなふるごとくもさいをれとり又
の目雨ありたるを殿ハこれふなんわがすぐせ
ハ見え侍りぬるいりぞゆらんずるとゆえさせ
あふゆおちることよりなり

とふときお 二百廿九段

九条志やくぢやう。念佛の急う。

歌を 二百三十段

朽とて門 神楽歌もをりし 今やうをあら
くてくせづきたる。 風俗よくうたひる。

さーぬきハ 二百三十一段

むらけきのとき。もえぎ。なハ二阿ゐいと阿

枕草子 卷五

抄
集
卷
五

夏虫の色ハ裏の赤
きすしの惣名を
蟬の羽色といふ類
なるべし

ひのさうぞくハ登
の紫束といふ意
て束帯の事也其袍
の下は着る紅の一
重をいふ
授色をさみたるハ
紅の色さめたるを
いふ
練色の云々ハ練色
ハ赤きをいふさて

ほ色の糸をも勿論
きハ着れともものさ
也

さるハ云くハ酒の
文字一つのせんさ
くもするなれとぞ
も人の上のみ沙汰
して自ハ万すもま
くれてもえせずと
のまゝ
さりとも云々ハ我
すくれましてハ人
の上をもよくハ志
られし唯思ふ俵を
口ふまうせていふ
あらんとく

つきは夏虫の色しよるも涼しげ也

かまぎぬを 二百廿二段

かうぞめのうすき。白き。ふくされあう色。松
の葉色あする。まき。さくら。柳又あをき。

ふぢ。男ハあう色のきぬも。

ひとへハ 二百廿三段

白き。ひ乃さうぞくのねのひとへ。あこめあ
どかりそめあ着るハよし。さきど猶色黄をみ
たるひとへあど着るハいと心づきあし。ねり
色のきぬもきこきど猶ひとへハ白うてぞ。男も
女も万のりまさりてこそ。

わろき抱を 二百廿四段

詞の文字何やくつうひよるこそ何きこも
ト一つよあやなくもあてふも。賤志くもなるハ
いうなるふりあらん。さるハかう思ふ人ふらつづ
のりふすぐれてもえあらトうし。いづきをよき
あきとい志るふりあらん。さりとも人を志ら
じ。どは打おがゆるもいふめり。雅義のりをい
ひて。そのりさせんとすといそんといふを。と文字
をうしあひ。いをんずる里へ出ん。むるなど
いハバ。やがていとわろし。まして文をりきてハ
いふ。きあもあらば。抱括こそあし。うかきあど

枕
草
集
卷
五

柳 華 紅 卷 五

つくり人さへ云々
ハ書損すれハ作者
ふさへ筆の毒也と
のき也。
ひでつくるハ秘点
を付るをいふ

我洞ふもてつけて
云々ハ特更ふいふ
ハよれと帝の洞
ふいふハよろしと
のき也。
下襲ハ打張漆など
呂々あり公卿及び
禁色の人ハ綾を用
ひ。色色の人ハ平絹
也。

赤色ハありきハ赤
色の地残なるハ赤
骨も有ると也。
ひあふきハ檜扇也。
むもんハ巻地のを
いふ。

八幡云々ハ廿二社
次第云ハ幡三所應
神天皇神功皇后玉
依姫とあり

佐保殿ハ奈良ふあ
り淡海公の家冬嗣
の大馬の家と拾芥
抄ふあり。

それバ。いひぐひなく。つくま人さへいとほし
き。おほま。空本のまう。あどろき付さるいと口を
し。ひでつくるまよあどいふ人ともありき。むとむ
といふ子を。えんと皆いふめり。いとあやまき
みを。男などとも。わざとつくろハで。殊更いふハ
あし。のらむ。我洞ふもてつけていふ。心おとり
するも也。

あさがさねを 二百卅五段

冬ハつと。搔ねりがさね。蘇芳かさね。夏

ハ二ある。白がさね。

扇のねねを 二百卅六段

あをいろを。あけき。むらけきハこどり。

ひあふぎハ 二百卅七段

むもん。くらゑ。

ゆハ 二百卅八段

松の尾。八幡は國のみうどよておハ。まし々
んこそ。いとめでさ。なれ。行幸あどふ。あぎれ花の
みこ。小奉るあど。いとめでさ。大原野。賀茂ハ
更。くいな。なり。春日いとめでさ。く。覚えさせあふさ
不どの。あど。いふ。名さへをり。平野をい。こづら
なる。屋あま。を。こ。ハ。何。ある。所ぞと。ひ。ハ
バ。み。こ。わ。どり。とい。ひ。も。めで。た。し。い。が。き。ふ

枕 神 氏 巻 五

秋ふハあへむハ古
今集ふ千早振神の
い垣ふもふ葛も秋
ふハあへむ移ろひ
ふけりとある貫之
り歌をいふ

いりぐさきハ近江
國なる子蜻蛉日記
ふよりてあるし
三保り崎駿河國也
まろ屋ハちいさき
賤の屋をいふ
あづまやハ和名鈔
小四阿阿豆万夜と
あり

時奏するハ林中ハ
夜時を奏する子あ
り亥の一刻あり左
近漸夜行して官人
時を奏申すの一刻
よりまさ近漸夜
行する也
こわくとハ官人の
志てふきの聲也
つるうちハ弓弦を
引きならす也
あんけの云々ハ何
家の某と名乗る也
時のくひハ漏刻ハ
銅壺ハ水を入れて前
をさて其前ハ四
十八刻をつけて彼
銅壺の水の滴りて
一のきさを現せハ
則ち一刻也四刻を
一時とす故ふ子一
二三四ふといふ也

昔ふどのおろくろりして
ふハあへむと貫之が歌
久一うさむと里し
みことりの神いとをうし

崎ハ 二百卅九段
いりぐさき 三保り崎

屋ハ 二百四十段
まろ屋 あづまや

時奏する 二百四十一段

時そりするいみどりをうし
いみどろ寒きハ夜
あつむりなどふごわくと
ごわめまぐつむり
きてつるうちあどして
なんけの何がし時うし

こつねよつなどあてそらなる
聲ふいひて時ハ
くひさを音などいみどろ
をうしねれつうしハ
つちどこそさとびさる人
ハいへまべそ何あ
よつのまごくひをさし
ける日のうららとある
ひるつ方いさうあけて
ねの時あどあひま
らする程ふをのこども
めしたるこそいみどろ
をうしハ歌中をうり又
清ふえれまこえさ
るいみどろめたし

成信中将 二百四十二段

成信中将を入道兵部卿の宮
れ子よてかさち
いとをりしげふふを
つもいとをりしうおを
ま

九
神
氏
卷
五

柳菴先生
早稲
細
卷
五

曉ふいくとして云々
ハ女の伊豫へゆく
として名残ふ成信の
おとせし也。
そのりみ常ふハ女
の未と忘れさり
し時也。

のさまひハハ物
語を給ひし物をと
傍の書さしてとめ
たる也。
くすちりする者ハ
実法不する人也。
名をさうふてハ其
名を姓ふてつけら
る赤漆御門式於
なしの類也
をうしき方かとも

伊とちのねまけがむすめれ志らきて。伊豫へお
やのくどり〜などいふあをれたるま〜んどこ
そおがえ〜。曉ふいくとして。こよみおをしまし
て。あけの目にかへりあひらん直衣姿かどこそ。
そのりみつねあるて。おがさりし人のうへなど。
わろまハころ〜などのさまひ〜。

兵部 二百四十三段

おいみふどくもあうまる者の名をさうふても
なる人のあるが。ここと人の子ふなりて。平なとい
〜ど。さ〜もとの姓を若き人と。ことぐさ〜てわ
らふ。ありさまもことなるふか。兵部としてをう

う〜きハ風流の方
も有難きの意也。
さしあしりハ物不
さし出る也。
腹き〜あ〜云々ハ
誰もま地日ろく兵
部ハ宮のまけしき
をありて告る人も
な〜りしと也。

兵部のおと〜一本
ふおも〜あり。

しきか〜な〜も〜さ〜ま〜が〜人〜あ〜し〜さ〜
〜ま〜じ〜心〜な〜どの〜有るも。はま〜わ〜り〜ふ〜え〜ぐ
〜る〜あ〜ど〜作〜せらるれど。腹き〜あ〜く。志りつぐる
人もあ〜。一糸の院つくられたる一間れあ〜。ハ
つらき人をバけらふよせむ。東の西門ふつとむ
りひて。を〜り〜き〜ふ〜び〜さ〜。ハ武部のおと〜。もろ
とも。に。夜もひるもあれを〜へ。と常〜お〜ゆ〜らん
ドに。出させあ〜。こよみハみか〜うち〜ねんとて。
南のひさ〜。ふ二人あ〜。ぬるのちふいみじ〜。さ
〜く〜人〜のあるふ〜る〜さ〜。あ〜どいひあをせて。ね
〜る〜や〜う〜て〜あれを。怪いみぢ〜。か〜が〜ま〜し〜う

枕草紙
巻
五

枕詞 卷五

あれおこせ云々ハ
后宮の御也。

やうてあつきて云々ハ
彼兵部、湯少納言などのおきぬよしを、戸少く男おいひあつきて、やうて其男と語ふ也。
只みそらみハ、湯少納言などのひそり笑ふ也。
此君いとゆし云々ハ、権中将清少納言心として来たるお心あさきあごごなれば、そしるまご

うぶを、あおこせ、おねならんと仰せらるるを、おは兵部きておこせど、ねさるさまあれば、更におきあを、けりけりといひ、いきたるが、やうてあつきて、おいふなり、あごらりと、おふふ、夜いさうふらぬ、権中おまこ、そ何あれ、こを、何身を、かういひふとして、只みそらみ、笑ふも、いうでう、あらん、曉までいひあうして、かへりぬ、は君いとゆし、けりけり、更におおせん、おいそ、何身を、さはいひあう、すぞなど、わらふよ、やり、戸をあけて、女を、いりぬ、つとめて、傍のひさし、お、おい、ふを、きけ、ハ、雨のい、ミド、うふる、目、きたる、人、あ、ん、い、と、あ、え

あなたの夜ハ一昨
夜あり

きたる、目、ご、ろ、お、お、つ、う、な、う、つ、ら、き、ず、何、り、と、も、さて、ぬ、ま、て、き、さ、ら、ば、う、き、ず、も、皆、忘、れ、ぬ、ご、し、と、を、お、ど、て、い、ふ、よ、り、何、らん、を、よ、べ、も、昨、日、の、夜、も、それ、が、何、た、う、の、物、も、ま、ぐ、て、は、比、な、う、ち、志、き、り、見、ゆる、人、の、こ、よ、ひ、も、い、み、ド、う、ら、ん、雨、ふ、け、ハ、ら、で、き、さ、ら、ん、ハ、一、敷、も、つ、ご、て、ド、と、お、ふ、あ、め、り、と、あ、を、れ、な、る、べ、し、け、て、目、比、を、見、え、む、た、が、つ、う、お、くて、す、ぐ、さ、ん、人、の、う、ち、お、お、あ、し、も、ら、ん、を、お、さ、ら、ふ、又、心、ざ、し、あ、る、お、を、え、せ、ド、と、こ、を、思、へ、人、の、心、々、あ、ま、い、バ、よ、や、あ、ら、ん、お、え、し、ま、お、ひ、あ、り、さ、る、女、の、心、あ、り、と、見、ゆる、か、ど、を、お、う、こ、ら、ひ、て、あ、ま

枕詞 卷五

沈草氏 巻五

もとよりゆりのよすが
いもとよりたより
と頼む本妻をゆふ

月のあつきあき
らん人いしもい
本月のあつきいし
もあつきいし行末

といく不とありもとよりのよすがなどもあき
バ。志がうしもえこぬを寝さるいもとりまを
りふきとりしるあど人よも務りつがせ身をほ
めらさんとあふ人の志わざよやそれもむげふ
心ざしなうらんよ何いふりハ。はもつくりず
志ても見えんとも思もん。さきど雨のふる時ハ
とむつうしう。今朝あをさぐしうりつ教空
ともおがえむ。ふく。ていみじき細殿のめでさ
きおともおがえむ。ましていとけらぬ家などハ
とくふりやみねうーとこそおがゆれ月のあつ
きふきたらん人いしも。十日廿日一月もーハ一

まてあひのこさる
るあひのこさる
うれめてくあそ
れあひのこさる
くおあひのこさる
たらん人ハ。十日二
十日とあり。

こまの物語今の
世は借らぬもの語
なり。
虫をみよるかたを
りハ。志あまのさし
とる扇也。
もと見し駒一本ハ

年ふてもま。て七ハ年ふなりても。あひ出さ
んハ。いみじきうきうと招がえて。え逢ふまじう
わりあき所人めつ。むべきやうありとも。うあ
らずまがら抱いひてか。し。又とまるべうら
んを。バ。とめあど。つべし。月のあつき見るを
うり。とほく物あひやられ。さあし。うりうりしも。
嬉しうりしも。をうしとたがえ。しも。只今のやう
ふ抱がゆるおやハある。こまの物語ハ。何ぞう
りを。う。きるもな。く。詞もふるめき。見所抱がう
らねど。月ふむ。う。を。あひ出。て。虫を。み。たる。か。を
がり。取。出。て。も。と。見。し。こ。ま。あ。い。ひ。て。さ。る。う

沈草氏 巻五

柳 車 約 巻 五

もと来しこまとありきて大和物語ふ夕されハ道も見えねと故郷をもと来し駒ふまりせてそめくとある歌をいふなるへし。

うゝ野の少将云々ハ落窪の君を右近少将といふ人。心さし深くて雨のふる夜うゝひをぬり其頃交野の少将といふ人も。此君み心うけこれどらひあうりしをいふ。さて此事落窪物語にあ

どあハ色也。雨を心もとあき拍と。心ひ志みとまむよやか。かゝ時あるもいとふくゝぞ何る。やんごとなき。子。面。白。うるべ。き。子。き。と。く。め。で。う。る。べ。き。子。も。雨。ご。ふ。ふ。き。バ。い。ふ。う。ひ。あ。く。口。を。き。ふ。何。う。せ。ぬ。れ。て。か。こ。ち。さ。ら。ん。が。め。で。う。ら。ん。が。ふ。う。ゝ。の。少。将。も。ど。き。た。る。お。ち。く。が。の。少。将。な。ど。ハ。を。う。し。そ。れ。も。よ。べ。を。と。ひ。の。夜。も。あ。し。う。バ。こ。そ。を。う。し。な。れ。足。洗。ひ。さ。る。ぞ。ふ。く。き。さ。か。う。り。く。ん。さ。ら。で。ハ。何。う。風。な。ど。の。吹。あ。ら。く。き。お。き。た。る。ハ。こ。の。も。く。て。き。う。志。う。も。あ。り。あ。ん。き。こ。そ。い。と。め。で。う。れ。あ。れ。め。や。な。ど。ひ。と。う。ご。

り。足洗ひたるそハ右近少将三日の夜徒ふておとし水もて内足まませしうあるをいふ。ろくさう。緑衫ふて六位の袍の色也。

ちて。志のびさるる。ハ。は。ら。也。いと。さ。あ。ら。ぬ。と。こ。ろ。も。直。衣。な。ど。を。更。も。も。い。を。ず。か。り。衣。う。つ。の。ま。ぬ。藏。人。の。あ。を。い。ろ。な。ど。の。い。と。ひ。や。ゝ。の。よ。ぬ。ま。たら。ん。ハ。い。ま。ど。う。を。う。か。る。べ。し。ろ。う。は。う。な。り。と。も。き。ふ。ご。に。ぬ。れ。を。む。ふ。く。う。る。ま。ど。む。う。の。藏。人。ハ。よ。る。あ。ど。人。の。も。と。あ。ど。ふ。ご。あ。を。色。を。き。て。雨。ふ。ぬ。れ。て。と。志。が。り。な。ど。け。る。と。う。今。ハ。ひ。る。ご。あ。着。ざ。め。り。只。ろ。う。さ。う。を。の。こ。こ。そ。打。かつ。ぎ。た。め。き。ふ。な。ど。の。着。た。る。を。ま。ま。し。て。い。と。を。う。ゝ。の。り。し。物。を。う。く。す。て。雨。よ。あ。り。う。ぬ。人。や。ハ。あ。ら。ん。ず。ら。ん。月。の。い。と。あ。り。き。お。の。残。の。い。み。

衛府ハ衛門兵衛の類也。かく聞て云々ハ兵約り河をさしていへる也。

沈 草 氏 卷 五

和歌集
卷五

何うも云々ハつれなきを恨みたる男の句也。

あけさてハハ。夜あけぬれハ也。きんくしハ。屹と立ちたる也。

どうありきふさぐ何らずともあたるをひさし
ふさしいれたるを月ふあてく見しこそをうし
のりし雨ふらんおハさをありちんや。

五づさ 二百四十四段

常ふ文おこする人の何うハ。今ハいひありひあし
今ハなごいひと又の目おともせねばはまぐよ
あけさてバ文の見えぬこそはうぐしやれと思
ひて。さてもまきつぐしうりける心うなあどいひ
てくらいつ又の目雨いさうふるひるまで音も
せねバむげふるひ絶えふたりあどいひて。をし
のうさるたる夕ぐれふ笠さしたる童のむく

水まき雨のハ古今集ふ真旅うる波の河水雨ふれハ常よりことよまざる我恋とあるを略せる詞なる也。あしハさしもあるす一本今朝ハさしも見えさうつる空のとあり。

びしきハ美々しき也。家のとハ家の外也。

おまべたるハむすまれさるの約也。ひさししける墨ハ封し目の墨也。

きたるをつねよりもとくあけてそれバ水まき
雨のとあるいとおやくさみわつる歌どももふ
りハをうし。さあしをさしも何らずさえつ
る空のいとくらうかまくをうて。あはれうきくら
しふるふいと心不そく見出まをどもたなく白く
つもりて。猶いみじうふるよ。は身どちて。不そや
りふびしききをのこれがらうさはして。そをま
かさある家れとより入て文をさし。いささるこ
そをうし。やれいと白きみちのくよ。残志ろき色
残のむまべさるうへふひき涙しける墨のふと
氷まふれバすそりすふなりたるを。あけされ

和歌集
卷五

打不、名む所ハ、文
を見る、微笑する
ハ何事書し所そと
のま也。

おもやう、まきハ容
白のよき也。

むいとおく、まきて、結びよるまきめハ、こまのぐと
くおとこるふ墨のいとくろりやうすく、くさりせ
むふらうへうきみだりよるを、うちかへし久
志う見るこそ、なうさうあらんとぶそふて見やり
とるもをうし、れまいて打不、名む所ハ、いと
ゆるしけきど、遠うあさるハ、くろき文字あどを
くりぞ、さおめりとお不ゆるうし、ひさひ髪もや
このふおもやうよき人のくろまきなどふ文をえて、
火ともすむども心もとふまよや火をけの火を
をさこつげて、さどくしげふんあさるこそをう
し、れ也。

きらしくしきハ威儀
正しく立派なるま
也。

五大尊ハ、五壇の御
修法をいふ也。

季の御凌経ハ二月
八月禁中して大般
若経を講せらる、
をいふ。

こんげんろくの屏
風ハ、坤元録の山河
なるとのまきをうき
まをいふ。
かんたよのハ漢書
本記したるまをいふ。

きらしくしき物 二百四十五段

大物のゆさまきおひよる。孔雀經のゆ續經。ゆ
修法ハ五大尊。藏人の式部れせう、向るの日大
路わりたる。ゆ富令左右衛門佐すまきぬやり
たる。季の御凌経。熾盛光のゆ修法。神のい
とくたるゆ不神なりの陳こそいみじうおそる
し、れ。左右大物中少物をどのみうり一のつ
らふ物らひあふいとをうしげ也。果ぬるをり大
物のお不せてのなりおりとのおふらん。こん
げんろくのゆ屏風こそをう志うお不ゆる名ふ
れ。かんたよ此ゆ屏風ハ、をうしくぞゆえよる。

のゑつきしをいふ
月次のハ年中行事
をりきたるをいふ
さて此屏風をいへ
るハきらくしき物
ふハあらざるよし
此前脱文あるりと
ある人いへり。

月次のハ屏風もをりし。

火をけの火 二百四十六段

かゝるまがへかどして物ふりく返る。さむきこと
いとわりあくおとがひなども皆おちぬべきを
からりぞて来つきて火をけ引よせさるふ火の
おろきうて露くろみさるふなくめでしきをこ
まうたる灰のかりよりおこし出さるるをいみ
とらうとせしけれ物あといひそ火のまゆらんも
志らずあるよこと人の来て炭いれておこす
こそいとみくられされどめぐりふおきて中不
火をあらせさるハよし皆火をせざまふりきや

めぐりふおきてハ
炭を火のまをりふ
おきのさ也。

清格子まゐらせて
ハ清格子をおろさ
せて也。

りてすゑをりさねおきたるいさゞきふ火ども
おきたるがいとむつりし。

香爐峰の雪 二百四十七段

雪いとさうく降るをれいからず清格子まゐ
らせてすびつふ火おこして。お語たどしてあつ
まりさぶらふふ少納言云。香爐峰の雪ハいうな
らんと仰せられれを。み格子あげさせて。みま
るくまきあげされば笑をせぬ人くも皆さる
るハ知り。歌あどみはへりさへど。おひこそよら
ざりつと。猶は宮の人ふハさるべきなめりとい
ふ。

みまるくまきあげ
ハ白氏文集云遺愛
寺鐘歌枕聴香爐峰
雪撥簾看とある詩
の意也。

猶此宮の人よ云
々ハ清少納言を不
めて此宮の正方不
さふらふ人ふれハ

さる故争をも知る
へき事也と人々の
ゆゑ也

なほこそハ岩崎美
隆云直こそよて大
方不の意也陰陽師
の子不てハさハ當
然の事と大方不
そきけし也
いうけハ決懸也後
して物のけなとの
絶えいうたる時面
不冷水をそきり
けふともいぬぬ
利ハ不立走るをい
ふ也

陰陽師の件なる童

二百四十八段

陰陽師のもとあるわらハづこそいそむく物ハ
ありされ後ふどあよ出されバさいとんあどよ
むる人ハなほこそきけそと立走りてあろき水
いうけさせよともいそぬふあありくさまの例
ありいさゝらまおいそせぬこそうらやまし
られさらん人をぶあつうハんとこそおぢゆ也
柳のまゆ 二百四十九段
三月をうり物いみしふとてうりそめあお人の
家いきされバ本どもなごをうぐしからぬ中
ふ柳といひて傍のやうふたまめうくハあら

さうしらふハ賢
ちて也春の面をハ
揚の葉の廣くみく
けたるハ春の面目
をよこすと也

でふひろり又えそふくげたるをあらぬおたるめ
りといハバうゝるもありたごといふよ
さうしらふ柳のまゆのひろごりて春のおも
てをふする宿かあ
とこそ見えしう

くらしうねける

二百五十段

其頃又同じお思しよざやうのふふ出さるふ二
目といふひるつういといとつれぐまさりてこ
が今もまゐりぬべき心地するやどふしもおや
せるあれむいとうれくて見るあさみどりの
紙不宰相の君いとをうくうきあへり

るふ一方をハ、姑少
納言のまゝ上らさ
りし己前をいふ。此
歌千載集の御書ハ
一条院時皇后宮
少清少納言始めて
侍りける頃、三月廿
八、二三日まうり出
侍りけるとあり。
くらしてつらふハ、
千載集ハ暮しまふ
てふとあり。
まゝくしハハ、宰
相より私の消息也。
此君ハ、宰相をいふ。
まうらともハ、まう
さびしきハ、住まう
らと申思ひて、后宮
の所つとくをあら
て、里居し侍りし事
ふとのまゝ。
まゝくしハハ、宰

いうふしてるふしうをすぐしらんくらし
わづらふまきのふりあうな
とあん、わくしハ、今日しとちとせの心地す
るを、曉どふとくとあり。は君のれたまをんごよ
をうしかるべきを、まして仰せごとのさまふハ
おろうならぬこゝちすれど、けいせんまうといお
がえぬこそ。
雲のうへおくらしうねける春の目をあうら
ともあがめつる哉
わくしハ、ふまごよひのなども、少物ふやなり、傳
らんむらんとて、曉あまるまうられ、まきのふれ返

相への返す也。
少将ハ、やハ、深草の
少将の世話、ふてい
へる也。早くまゐり
さき心いられハ、今
夜一夜を待たねて、
うせもやせんとの
ま也。
くらしうねけるこ
そ云くハ、あまうり
うけはりたるまう
と、さそふれ終へる
也。いとふくしハ、ふ
くけきの誤あらん
あるらん物を云々
ハ、歌ふあぐめたる
意を伺ふつ、けて
あらそしる也。
ふめけをならぬもハ、
ひ通すうく、武の作

くらしうねけるこ
そ云くハ、あまうり
うけはりたるまう
と、さそふれ終へる
也。いとふくしハ、ふ
くけきの誤あらん
あるらん物を云々
ハ、歌ふあぐめたる
意を伺ふつ、けて
あらそしる也。
ふめけをならぬもハ、
ひ通すうく、武の作
こよなれは居 二百五十一段
清みふこをりたるころ、びぐらしのいみじうか
くを、あそれときくに、わざと、使志てのたまを
せ、さりしがらのうみのあうと、さるふ。
ふちうき入あひのかねれ、こ急ごとな、こある
心の教を志るらん
ものを、こよなれあがるやとか、せあへ、新、残を
どのなめげあらぬも、とり忘れさるさびよてむ

初草 細巻 五

法入りかへるうな
き也。
蓮の花ひらハ散花
の花ひら也。

岩崎美隆云、諸本如
此若くは此次ハ少
納の歌のありしう
脱るるまや。
そやハ初夜也。一本
ハ半夜とあり。

さるひの云々ハ垂
氷ホてつらハの軒
ハ垂れさうりしを
りハ

らはきたるをちすれ花びらふかきてまゐらま
る。

凜くとして氷志たり 二百五十二段

十二月二十四日、宮の仏名れそやの仏守師守
て出る人も敷ありとるぬらんうし里へと出も
しハ忍びさるおへも敷のやど出るおもあれ阿
ひのりさる及れ程こそをうり々れ日ぐる降つ
る雪の今然ハやみて風なまどのいさう吹つれバ
さるひのいみどろ志どりづちあどこそむら
くるきあれ屋のうハハおーなべて白きふ
あやしき賤の屋もおもがく志てあゆの月のく

うねたどおしへき
ハ雪の月ハ映じこ
るハ銀をうすく折
きさるやうなりと
のさく
するあやうのくき
軒の垂氷の水晶の
茎のやうありと也。

まあきいみどろをうり。かぬたどおーぎた
るやうなるあずるあやうのくきふどいとまや
しきやうふてあがくまじかく。ことさらかけわ
さしさると見えでいふもあまりてめでさき
たるひふ下すざれもかけぬ車の簾をいとたう
くあげさるハおくまでゆー入さる月ふうす色
お梅白きたどせつハつをうり着さるうへふこ
ききぬのいとあざやうなるつやなど月ふもえ
てをうしう見ゆるうハいらにえびぞめれうさ
もんのさーぬき白ききぬどもあまふ山吹くれ
たるあどきこがしそふやし乃いと白きひきと

枕草紙 卷五

としきみハ和名鈔
ふ載説文云載車前
也とあり

月影のもしさあさ
みハあまり明ある
故女の面恥しく月
をばしさあく思ふ
也
まんとしそハ朗
詠云八月十五夜秦
旬之一千余里凛々
氷鋪とある句也

出あつまりハ里亭
へいて集る也

君々の内よりハ我ま
君の内より
宮の内外のもしハ
一本ハ宮の内との
をらとあり

又むつまじく来る
ハらの宮仕人の許
へ也

糸らん折ハハま君
の内方へ也

きたれぬきたれらとていみじうこそ色いで
とりはぬきれうとつ方ハとしきみのとにふ
み出されたるなど乃ハ人のあひさらバをうし
と見つべし月影のもしさあさふうしろさまへ
まぐり入るるをびきよせあらそふあさきて笑
ふとをうしまんとしそはり志け里とりめ侍
を返もくずんとておとするハいみじうをうし
うて秋一敷も何里うまわしきふいくおの近く
なるも口をし

宮づうへ人 二百五十三段

みやづうへする人ハ乃出あつまりて君どの内

りめできこえ宮の内外れをしのりどもかこみ
ふ語里合せるをおのが君々を家あるトよて
すこそをうしけれ 家ひろくきよげふて志ん
ぞくをさら也とぞ打かたらひなどする人ふハ
宮づうへ人うとつうさふを急てこそあらまわ
しけれはるべき折ハひとおにあつまりあてお
活し人のよこる歌何くれとかたりあかせ人
の文あどもてくるもろともに見返りかき又む
つまじうくる人もあるハ清げふ打志つらひく
いれ雨などふりてえぬらぬもをうしうもてな
しまるらん折ハ生り見入ておハんさまふして

よき人の云々の宮仕人の内まるるか
とふつけてそ人の御さまのゆうしく
きうまをしきハ我なうら怪しき心也
この意也

ふまけしうらぬえ
せ者ハ一本ふ打と
くましき物のまじ
めふあり

あさみとりのハ蒼
海のさま浅緑の指
の打とるをひける
やうありと也

いだーとてなごせをやよき人のおいしますす
ありさまあどいとゆうーきぞけーうらぬ心ふ
やうらん

見あらひするお 二百五十四段

あくび。ちごども。なまろしくらぬえせ者。

打とくまーぎお 二百五十五段

何ーと人ふいもる、人さるハよしとあられと
るよりハうらなくぞえゆる。舟のみち日れう
らうなるふ海乃おもてのいみじうのどろよ
あさみどりのうちたるを引渡したるやうふ見
えていさうおそろーきわしきもあきわらき

ろといふ物ハ樽也

ふごうりつるハ和
の字よて穂をうし
をいふ

よろーき深さハ大
方よて格別の深さ
ならぬ也

女のおこめむり着る侍ひの者の若やうな
るもろともにろといふおおして歌をいみどら
うとひさるいとをうーうやんどとあき人よも
見せ奉らまろしうおひいくふ風いとうふき海
のおもてのよごあれふ何ーうあるふ物もお不
えげとまるべき所ふこぎつくるふど舟ふ浪の
かけさるさまなどをもさむりあごかりつる海
とも見えむろし思へば舟ふのりて何とく人バ
かりゆーしきとのこそあわれよろしき深さふ
てごふさるもろあきおふのりてこぎゆくべき
おふぞあらぬやまーて底ひも志らず千尋あど

和名抄云蓬庫布奈夜加太舟上屋也釋名云舟上屋謂之廬言象廬舍也とあり
そやきハ早緒也舟の櫓付る繩をいふ

やうハ和名抄云唐韻云蓬庫布奈夜加太舟上屋也釋名云舟上屋謂之廬言象廬舍也とあり
そやきハ早緒也舟の櫓付る繩をいふ

も何らんふ物をいと多くつみいれされをなまざ
ハを只一尺をうりまぶあまきにげまどもものいさ
さうおそろしとも思ひたらば走り何れまきつゆ
あらくもせむ志づみやせんと思ふふ犬きなる
ねの本などの二三尺をうりふてまろあるをを
つらつがうくとなげ入きなどするこそいみじ
々也やうとといふおふぞおはすされど奥なる
はいさうとのもしもしふとる者どもこそ
目くるし心地をれそやきつけてのどろよすげ
たるおの弱けさよとえおを何ふうをならんふ
とおちいりあんをぞれぶいみどろふとくか

もくらのすきうけハ一本ふもくらのすうけとあり帽額の簾をうけとる也此方や然るへうら
されどひとしうハ我舟ハうの水き一尺斗ふ豆いりる舟と回しやうふ重くハあらねと也
もし舟ハ和名抄云漢語抄云艇乎夫称游艇波之布称唐韻云艇小船也釈名云一二人所乗也
あとの白浪ハ朗泳不世中を何とこまへん朝ならんこまゆく舟の跡の白浪とある歌をつふ

ども何らず我のりたるをきよげふもかうのす
きうげ妻戸格戸あげかどしてされどひとしう
おもげふなどもあらねばよ家のちひさきふ
てありとと舟えやるこそいみどろれとほまきハ
まことふ笹の葉をつくりて打ちらしたるやう
よぞいとよく似るとまよりたる所まで舟ごと
ふ火ともしとるをうりうえゆそし舟とつけて
いみどろちひさきふのりてこぎあましくほとめ
てあどいとあれ也あとの白浪ハ艇ふこそま
えもてゆけよろしき人ハのりてあましくまじき
りよこそ猶おがゆまかち海と又いとおそろし

枕草紙 卷五

枕草子 卷之五

かち路ハ陸路也。
海士のうつきハ潜
女などいふありあ
まの水中不入てす
なるといふをうつ
きといふ也。
腰ふつきとる物ハ
むろハ、養の腰ふ
綱をつけて引あけ
しと也。
たぐ繩ハ、積繩也。

をかちたる息ハ、水
中より上りて息を
つくをいふ也。
志不さるハ、落涙れ

われどそれいりふもくつちふつきさればい
とたのもしと忍ふよ海士のうづき志さるはう
きわざなり腰につきたる物とえかむいりせ
んとおんをのこご不せむさてもありぬべきを
女ハねろげの心ならじ男ハのりて歌などう
ちうたさひてはよく繩を海ふうけありくいと
あやふくうろめよくハあらぬふや養ものぶ
らんとてハ、繩をあんひく取まどひくりいる
るさまぞことごとりなるや舟のちをれさへて
をかちたるいきなどこそまことふさく見る人
ご不志不さるゝおとし入てさぶふひありく

てし

おんを奉るハ、宇蘭
盆供をいふ也

このぬしハ、此まふ
子たる物とそくと
りおんするハ、盆の
字音ふ人を水にお

をのことも目もあやふあさまし、更ふ人乃あひの
くべきわざもあらぬふこそあめれ。

右衛門の尉 二百五十六段

右衛門のせうなる者のえせ親をもさりて人の
アるふおもてぶせなど見ぐるうあひけるが
伊豫のくふよりのぶるとして海ふおとしいれて
けるを人の心うがりばまじがりけるおどふせ
月十五日、おんを奉るとしていそぐを見あひて、乃
命阿ざま。

わよつうみふ親をれ入くこのぬしのぶん
する見るぞあそれなりける

枕草子 卷之五

和歌集 卷五

とす音をいひよせ
さうと或人いひり
いとやし一本おい
とをうしとあり
小野殿の母上ハ右
大将道細の母也

共新くる云々ハ提婆
品の拾遺設食のす
也即ち昨日のハ講
すみしきいハ下句
ハ王質ら故多ふよ
りて今日の遊ひの
面白きをいへりさ
て斧ハ小野をそへ
たり此歌拾遺集ハ
見えて下句いさ斧
の柄てこふくさ
さんとあり

とよみあひけるこそいとほしけれ

斧の柄 二百五十七段

又小野どの、母うへこそハ普門寺といふ所ハ
ハ溝へなるをきいて又乃日小野殿ふ人くあつ
まりて阿そびしふみつくくりけるに

とまじこるふハまきのふふつきふしを今日そ
をの、えこ、よくたさん

とよみあひなんこそめでさけれこもとをう
ちぎ、ふなりぬるおめり

いふく見まく 二百五十八段

又業平が母乃宮のいふく見まくとのあつるい

みじうあそれふをうし引あけて見さうらんこ
そあひやらるる

げもの歌うたふ 二百五十九段

をうしとあひし歌あどをゆうしふりきておま
たるふげもの打うさひさるこそ心うけまよみ
ふもふむかし

げもの人おむる 二百六十段

ふろしき男をげも女などの不めていみぢうか
つうしうこそおすれかどいへバやがてあひ
おとされぬぞしそしらるハ申々よしげまよ
不めらるハせんかどふわろし又おむるまよふ

こもともハ打聴ふ
ハ此段ハ人の歌と
もうけれハ別書の
やうよなりたりと
也
いふく見まくハ古
今集ハ伊豆内親王
の歌老ぬまハさら
ぬ別もありといへ
ハいふく見まくハ
しき君哉とあるを
いふ
引あけてハ業平の
母の文を引開きて
也
よみよもふむハ歌
吟せすして只詞よ
り也

和歌集 卷五

物をハハ濱云云を
ハハ通ふきよて
物上の意也。ハハ助
辞よていと軽し。

とハひとりハ少
納言一人也。

今更ハ云ハハ一條
院ねふらせ給ふを
とウむる也。

うとて何しハハ法
少納言の明侍る也
と猶こちしを後悔
せる也。

いひそこなひつるおをむ。

大納言殿 二百六十一段

大納言殿まありぬむくふみのうなどそうしぬ
ふふ傍の敷いたうふけぬむバハあなる人く一
二人づゝうせてハ屏風きちやうのうゝろあど
ふみあうくむふしぬむバたゞ一人ふありてね
ぶよまきを念じてさぶらふふうしよつとそうす
る也。あけゆりぬたうと猶ごつふ大納言殿今さ
らふおふとのごもまねをしますよとてぬべき
おふもおふゝらぬをうとて何しふさ申しつ
らんとおふども又人のあらバこそいままきむも

をさめり童ハ長女
の子たのの意也。

形明王のハ朗誦ふ
籍人曉唱於弱る明

せめうへのゆめの様ふよりかゝ里てすこしね
ぶらせぬへるをうれ見奉るへ今をあけぬる
ふかくおふとのごもるべきうらハと申させぬ
ふげふなど宮れおまへもわらひ申させぬふ
と志らせぬをぬやどふをさめがこらをれ。なむ
をとらへてもちてあす里ついつんといひてか
くしおきたりけるがいうぐん犬乃見付て
おひけれを廊のゆきふよげいきておそろゝう
なまきのゝ志るふ皆人れきたを志ぬ也。うへも打
おどろりせおをしましていつふあまつるぞと
尋ねさせぬふ大納言殿の形明王のぬぶりを

王之眠とある兼を
をいふ也。

人よべバハ遊者を
いふ也。
おる、ハ伊周公
の宛あて、流少納言
退出するりと也。

遊子将云々ハ朗詠
ふ佳人尽飾於晨粧
魏官鐘動遊子将行
於残月函谷鶏鳴と

ある價島々賤賦の
句也。

ゆめのとのまゝハ
すべて乳母の通称
をまゝといふ也。
をのこあるハ男の
そこのゝありし人
の也。
一本小傳抄の君の
ゆめのとみくしけ
とみとこそきこえ
めそのころねねふ
あふれハ男あると
云々とあり。
きたなく侍る所の
ハ彼男の家をいふ
かうなるハ和名抄ハ
寄居虫加美奈狼似

おどろうまといふ侍をよらう打出しあくるめ
でたうをうきふひとりねふたうりつる目も
おひきふなりぬいそどき折のうりなと官も興
ぜさせあふ程う、軽うこそめでたけれ又の日
をよるれおとふいらせあひぬ、鞍中むりりふ
廊ふ出て人よべバおる、ハ我おくらんとのか
へバ、裳うらぎぬハ、屏風ふうちかけていくふ月
のいみどらうありくて、直衣のいと志らう見ゆる
ふ、ちぬきれなうらふとく、あれて袖をひら
へそだふるなといひてゐておをするまゝに、遊
子猶のこりの月ふゆけむとずんどぬへる、又い

みじうめでたし、うやうのうめでまどふとて笑
ひこまへというでう、程いとをうきおをば、

ふとどれ 二百六十二段

傳都の君れゆめのとのまゝとみくしげ殿のみ
つねねふあふれバをのこある板志きのこととち
うくうりきて、うらい目をえさぶらひつる、推ふ
う、いうきへ申しはぶらハんとてなんとなきぬ
ばかりのなごしきふていふ、何ぞととへむあり
らさまふおへまうりたり、まにきたなく侍る
所のやけ侍りあ、うバ、目ごろをがうおれやう
ふ、人の家ふありをさ、いれてなんさぶらぬう

蜘蛛者也とあり。

ふとのさへハ、夜殿
と渡野ふそへたる
也。

まづりさのみまぐさつきて、侍りける家よりか
ん出まうで来て侍る也。只垣をへだて、侍をむ
ふどのふねて侍りける童べも、不らくやけ侍り
ぬべくふんいさ、うおもどうで侍らずふどい
ひをる。みくーけどのも聞給ひて、いみどり笑ひ
あふ。

みまぐさをもやま、バウリのまじひふふど此
は、なご、蹴ら、ゆるらん

とりきて、是をとらせぬ、つとてなげやま、わら
ひの、ありては、おを、まゐる人の家のやけたりと
て、いとほしがりて給ふぬるとしてとらせされバ。

何のゆゑんぞやく
より侍らん、美隆
云、按江次第、贈給の
為、當、大使、於、便所
短冊加封、或、散、短冊
之、便所、分、給、之、寫、年
病者、貧者、等、也、云々、
され、バ、人、不、物、賜、ふ
として、ハ、ま、つ、短、集、お
その、物、敷、を、記、して
其人、ふ、あ、つ、し、し、す
と、見、ゆ、此、も、さ、る、ふ
ある、故、此、男、の、物、賜
る、ふ、う、り、て、短、冊、を
と思へる也。
か、め、も、あ、ま、き、つ、り
う、ま、つ、ら、で、ハ、片、目
も、あ、り、て、ハ、と、也、此
男、を、筆、あ、る、ふ、を、云、
お、や、ひ、と、り、ハ、父、の
み、一、人、の、ま、也。

何のゆゑんぞやく、みり侍らん、抱いくら、バウリ
ありといへ、まづよめか、つと、い、う、で、り、か
とめもあまきつらう、ま、つ、ら、で、ハ、い、い、ハ、人、あ、も
見せよ、只今めせむと、みおて、うへ、る、ま、る、る、ぞ、さ
バウリめで、ま、抱、を、え、て、ハ、何、を、う、思、ふ、と、て、皆
わらひ、ま、ど、ひ、そ、の、が、り、ぬ、れ、む、人、よ、お、え、せ、つ、ら
ん、里、ふ、い、ま、て、い、り、み、腹、た、ん、あ、ど、は、あ、み、ま、あ
り、て、ま、く、の、け、い、す、ま、を、又、わ、ら、ひ、さ、わ、ぐ、は、あ、あ
も、あ、ど、う、く、抱、ぐる、お、し、う、ら、ん、と、笑、ハ、せ、あ、ふ。
女親をくありし男 二百六十三段
男ハ、め、お、や、あ、く、な、り、て、親、一、人、あ、る、い、み、じ、く、抱

己つらえしき北の方ハさかなき継母をいふ

故上ハなぐなりし実母をいふ

まらうとあもハ一本みまらうとあもとあり

ハあそびなとのうときハ管絃などの遊の相手也

もへどもわづらをしき北の方の出來てのちハ内あも入れむさうぞくかどのりハめのと又故上の人どもあど志てせさす西東の對のやどあまらうとあもいとをうらう屏風さうじの繪と見所ありてすまひたり殿上のおどらひのやど口をうらうらず人もおもひさうらうへあもハなぐきよくてつねあめつハあそびあどのうたきふハおぶしめしたるふねつねおあけうらう世の中心ふあをぬこち志てすきく志き心ぞがこをなるまであるべき上達部の又あきふもてかづられたるいもうとひとりある

バウリよぞあもをも打語らひなぐさめ所なりける

定澄僧都

二百六十四段

定澄僧都うらきたすあせい君よあこめなしといひなんもこそをうけられ

とつあふこ

二百六十五段

ある女房の遠江守の子なる人を語らひてあるがおあじ宮人をうらふと聞て恨まされバ親あどもうけてちうをせあふいみじきそらごと也あよぶよんぎとあんいふいりづいふべきといふときいて

定澄僧都云々ハ一本ハ四段のことことなる物といふ段の末よりたるをいふとすべし

親なともうけてハ彼男の二心なきと父の遠江守も神うけて誓ふ也いづいふへきハかやうは男ハあらうふをいふといえんと清少納言は相

淡せし也。ちりへ君云々ハ彼女房よかたりてよめる也。うさうけてハ遠江守を伸よそへもまなの橋を端いひひらるる也。胸のいさう走りたるハ胸さじきせしと也。

まことや云くハ抄本一ある女房の遠江守の云くの上あり。今方歳本一後ふ。思ひよ云くハ思

ひを火よそへてさせも草といひさて伊吹の里ハさしも草ある所あれいよせて伊吹一推り云ふとけ。里よさやうハのまをそへたり。伊吹里ハ美濃近江の堺なるハあらは下野國なり。おやうまハ海賊の織物なごの裳といふなるべし。志びらハ褶よて。延喜式ハ履袴之衣也とあり。うさみハ汗衫よて童女の装束也。見さめこよなハこよなく見さめすと也。

ちりへ君遠つ淡海れりみりけてむげよをまふのこしんざりきや。

はしり井 二百六十六段

びんあき所よて人よ胸をいひらるよむねのいみどろをしりるあどかくいあるといひらるいらへよ。

逢坂いむねのこつねよしり井のこつくる人やあらんどおもへど。

まことや下野よ下るといひらる人よ。おもひごよのらぬ山のさせも草推りいぶきのさといつげしぞ。

からきぬハ 二百六十七段

ありぎぬ。急びぞめ。もえぎ。さくら。すべ

てうもいろの類。

裳ハ 二百六十八段

れやうみ。志びら。

かざみそ 二百六十九段

妻まつど。様。夏ハ暑くちむ。袴よ。

お里物を 二百七十段

紫。志ろき。もえぎよか。をおりたる。即梅も

ふけもども。程んざめこよな。

とんハ 二百七十一段

りつあこのめさ
け着るハ片方の
行長由たりよち
たる衣也。
むねなともきれて
ハ片方へひりれて
胸あぬをいふま
せてきるハ常のと
よなることを着
交へすと也。
とろせりめりハ
左右由なるハ
ひろりて也。
りともま一本
かごつ方とあり。

あふひ。りごむ。

きぬの着ぎま 二百七十二段

なうす揃うつうされゆどけ着る人こそふ
くたれどあまさうさね着されどひりてきよ
くし綿あどあつきハむねなどもきれていと足
ぐるしませてきるべき揃ハあらず。袴昔より
さまよくきたるこそうき。左衣のゆどなる
ハふし。そきも袴女房のさうぞくよてハところ
せりめり。をとこのあまさうさぬるも。うさなり
まおもくぞ何らん。うきよらなるさうぞくの
揃り揃うまものなご。今ハなごこそあめ。い

かちよき云々美
隆云。按辰本ハ似
けなき物の条ハあ
り。
孫正みて云々ハ。彈
正ハ。すつらさ
とて。諸法度違背レ
簪をた。ま官あれ
ハ人愛すくなく形
よき君遠ハ似あ
らずと也。
官の中ハ。一品式
部卿為平親。二男
源頼定也。

まやうに。又さまよき人の着給らん。いとびんか
き揃り。かちよき君達の。彈正みておはま
る。いと足ぐる。官の中物あどの口を。うりし
うな。

やまひハ 二百七十三段

むね。おのけ。何のけ。よごそこをうとか
く揃をぬ。十八九むりれ人のかみ。いとうる
をしくて。よけむりす。そふさやうなるが。いと
よくこえて。いみ。うき。顔あ。いぎやうづ
き。よしと。見ゆるが。歯を。いとくや。みまどひて。
ひよひ。髪も。あ。と。な。き。ぬ。ら。し。う。これ。え。ざ。れ

枕草紙卷五

争かしのひは涼く思ひいらすさ一にたりなるさななり。よるあもハさし寄るあも也。

物つくしとおきあうりハ抄不物の氣

り、るもあらむおもて赤くしておさへるるこ
そをうりけれ。八月をうり白きひとへあふら
りたるをりまよきやどふて志をんのきぬのい
とあざやうなるを引りけてむねいみどらやめ
む友どちの女房さちあどがをるくまつ。いと
いとやーきさざう系例もくやあやみあふか
どふあーびふとふ人もあま心グけさる人ハま
ことふいみどとおもひあがき人あれぬ中をど
とあうて人めあひてよるあも近くもえよらす
あひながきさることををうりけれ。いとるをし
くもき髪を引ゆひておつくとしてたきあがりた

来るとおとろき起
きし也とあるを美
隆云下ふ後経の僧
云々とあまハ泣の
如くあもきこわれ
と猶こハ吐吐せ
んとまるさまをい
ふといへり。
めをくはりつハ
後経の傍の女房の
方小目をつくるを
いふ。

さ今の人ハ當時
出頭の人ノ意也。
ふくしとあふ人ハ
思もぬ男也さてお
しとかりことうち
しハ其男の女を二
心ありなと推量し
て恨む也。

るけーきもいと心ぐるーくらうさげなり。うつ
あもきこーめしてあどきやうの僧れ怒よきあ
をせさればどぶらひ人どもとあまう見えきて
寝き、あどするもかくをなまきふめをくむりつ
つよみあさることを罪やうらんとおがゆれ。
心づきあきとの 二百七十四段
おへゆきちへとまうづる目の雨。つうふ人の
我をバおがさず何ぐーこそさ今の人あどい
ふをそのきさる。人よりハ寝すこーふくし
とおもふ人のおーをうりまうちし。すぶるなる
おうらみし我うーこげなる。心あーきひとの。

枕草紙卷五

五六

心ありき人のハ一本心ありききめとのとあり、それうつみもあらねどハ乳母こそあれ養われたる子ふとかもあつれとのさ也。
あまゝあるが中ハ云々ハ乳母の潤也もとめてハ其子の心ありき乳母ともあらたなつうしりり求むる也。
じびしくふくき人ハ云々ハ我ハいひよるをこひしく思ふ思ふよいとひてすけなくいひをなすと猶難意なるさまを見するり心つきかしく也。

やいひある子さるハそれがつこふもあらねどかゝる人ふいととおがゆるゆるよやあらん所まゝあるが中ハ吐きこををひおと一あひてやふくまれあふあどあらうりふりあちごハあひもあらぬふやあらんもとめてかきまどふ心づきかきなめりおとかふありてとあひうしろみもてさくぐなどふ中々ある事こそ多うめれ。こびくみくき人よおもふ人のをこかくいへどそひつきてねんごろがるいさう心ありあどいへつねよりもちのつくしておくをせいとほへぐりせまうとあくあひあるふま

あまん人の云々ハ是より其物くふ故を相しをうりてくをする人もあきき故をいふ也。

こずバきてあんなハゆつけいふあるまをす心なき女と見らまりて来すなりかバ其かよてありなんと也。

つをれついでせうしとりもちたまどふ。宮づりつ人のもとよきあどする男のそこよておくふこそいとわろくれくをする人もいとふくし。あまん人のまづなど心ざりありていをんをいみたるやうに口をふさぎて顔をもてのくべきふもあらねばくひをるふこそあらぬいみとう急ひあどしそわりあく夜あけてとまりさりとて更ふゆづげぶくをせじ心もなうりなりとてこずをさてあんな里ふて北おもてより志せしやいりぐせんそれぶ程ぞある。初瀬ふまうでつがねあるるふあやしきげまどものう

里ふて云くハ宮仕
所ならて、里亭あと
の北の臺所がまよ
り志出して、物くは
せんハ各々のまよ
也。
うしろさしませつ
つハ背中を委ふ交
へて也。
くれをしハ構橋也。
初瀬ふあり。
その虫のやうなる
者ハ下屯のありさ
まをいふ。
前へらへハあをお
ひ拂ふ者也。
よろしき人ハ、やこ
とあきまでふハあ
らで申へんの程を
いふ。

しろさしませつ、居かまゝなるやしきこそない
が、ろあきいみじき心をおこしてまうでさる
ふ川の音などのたそろしきふくれをしをのが
りごうどていつう佛の口やををがみ奉ら
んとつがねよいそぎ入さるふこの虫のやうか
る者のあやしききぬ着たるがいとふくきさち
るぬりづきさるハおしとふ一つべき心ちこそ
すきいとやんどとあき人のつがねをりりこそ
まへたらひあれさるしき人ハせいあづらひ
ぬりしこのし人の師をよびていたすれば、そ
こどもすこしされおどいふやどこそあき阿ゆ

そこともハ、其方達
也。
あまみ出ぬれハ、
宿坊のあまみ退け
ハまよものやう
なりと也。
ついでにまよふハ
次第をたうへはと
也。
おとなふ事たる子
の云くハ、成長の子
此よりらぬすきさ
するをさつつけて
親の呉見するお直
面ふハいひふくし
と也。

み出ぬれば同じやうふありぬ。
いひふくきとめ。 二百七十五段
人のせうそと仰せごとなどの多るを、ついで
のまよに、まよめよりおくまでいといひふくし。
返事又申しよくし。 まづうしき人のおおこ
せたるうへりる。 おとあまなりたる子の志を
まよるまよまよつけたるまよへてハいといひふ
くし。
男女の志な 二百七十六段
四位五位ハ冬六位えなとの姿おども志かこ
そ。男も女もあらまよしきまよめを家の君ふて

それたふ云くハ一
家の内ふてハ其
衣服の品の吟味を
きハ他所の使者な
との物見ありたる
ハとらく批判し沙
汰まべしと也
猫の土まおりたる
やうふてハ衍文ふ
るべし或本ハ此
河の下ふ文の頼
カキ物といハ所
ふある人の顔ふと
りときよしと見ゆ
る所ハといふより
まもらるゝこそと
びしけとといふ造
らせりたまつしけ
たり
ある物ハ什物也
あをせをハ和名鈔
小籠四聲字苑云即

あるふも准りいふしあしをばむる。それふ
抱え知さる使ひ人ゆきて抱のづうらいふべう
めりましそまどらひまゐる人をいとこよあし。猫
のつちよ抱まゝるやうふて。
たくみの物くふ 二百七十七段
さくみの抱くふこそ。いとあやうたれ。寢殿をこ
て。東の對ごちたる屋をつく敷とて。たくみど
も居かきて抱くふを。東おもてよ出ゐて見れを。
まづもてくるやおそきと。ある抱とりて皆のみ
て。かをらけもついまゑつ。つぎあをせをみ
かくひつれを。抱ものハふまうかめりと見るや

愁反刈安不。一云阿
倍毛乃。擗蓋其以醋
和之とあり抄ふ。世
おいふさいといふ
物也とあるハ。まろ
し。
抱ものハ膳の飯也。
もといハ。勿作か
まきり也。
こと人ともものハ。う
ふをらなる人の也。
一説ふこと人と物
いひまきらすすと
ふあり。

どふやがてこそうせふし。二三人あさりし者。
皆させしうば。さくみのさるかめりと。あふ也。あ
かもといふのみども也。
抱ぐさりせよ 二百七十八段
抱ぐさりをもせよ。むう。抱ぐたりもせよ。けう
しらふいらへうち。て。こと人どもものいひまぎ
らハま人いとふくし。
有明の月のありつとも 二百七十九段
ある所ふ。中の君と。うやいひける人。れもとふ。君
さふハ。あらねども。そ心いさくすきたる者。ふい
た。色心をせふ。どある人の。九月。バうり。ふいきて。

枕草紙 卷五

言の義をつくして
ハ男のさまづくい
る也。

あめ月の云々ハ
拾遺集ハ月影の
あめ月のありつ
も君さままさハ我
恋めやもとある秋
也。
かみのかしらあも
云々ハ月影の女の
頭のあたりまでハ
さしいらて五寸を
うりこわさまでさ
したるさき也さう

あめ月のいみどうてりておもえろきふ名跡
おもひ出らんと言れ彙をつくしていへるう
今はいぬらんと遠く見おくるやどふえもい
おえんなるやど也出るやうお見せてさちうへ
りよて志とま何いさる陰のうさふそひ立て程
ゆまやらぬさまもいひ志らせんとおふよあめ
の月影ありつくとと打いひてさし一のぞきたる
うみのうらあもよりこず五寸をうりさぐり
て火ともしたるやうある月のひうりもよやさ
れておどろうさる心地志やれやをさうさち
いでおわりとこそ語りしり。

半かひ

二百八十段

りてハ避也一本ハ
さしのそきたるか
しこより五寸斗を
さりて火ともした
るやうなる月とあ
り。
心よそひふ云々ハ
うりおおさまらん
と用意せしと心よ
けいひて車をか
しおこせたと也
下さまうちいひ
てハ半をいさく
ひくさしおくむ也
をのことハうり
たる車の車そひの
男とも也。
まの心ハ車のまの
心よけいひひさ
るもの、猶不潔か
りしからんとおし
るうり志られさ

女房のまゐりまうでするふハ車をうるおもあ
るふ心よそひ志さるがふ打いひてかしたる
ふ半うひわらその例のうらうりも志もさまふ
うちいひていさうをさしうつもあかうたてと
おがゆうしをのこどもおどのおむづうげか
るやしまふていりて夜ふけぬさまきふおひて
りあんといふをさほまれ心おハうられてど
まれりやうと又いひふまんともおがえむなり
とほのあそんの車のみやあかうありつまわう
ず人の能るふいさうはるるかうりなんよく

枕草紙 卷五

卒

枕草子 卷五

と也。とこのふかりと云々ハ意用ふも又と車うるふいとんとハ思はずと也。ふくそをへ云々ハ下人をよくいひつけたりと也。くそいふくこのこの文字おちたるかるる也。

おきこるふのふ文まハと文字のあやまりたると也。

ことかしひふ云々ハ涼く心もとあすして世の常ふまうせてザツとくくふ

ぞをへへあらハせたりしう。及ふあひとりける女車のふりき所ふおとしいれて。えひきあげて半うひの腹だちりれ。我が造者志てうたせさへ志りれ。まとして心のまゝにいよめおきたるふ見えたり。

習むみする人 二百八十一段

すまぐとくして習ずみする人のふるハいづらふありつらん。曉ふぬりてやがておきこるまごねぶたげなる々しきふれど。礎とりよせ。墨こまやうふおしすりて。ことかしひふまうせてかどハあらず。心とゞめてりく。まひろげ姿をうりう見

ハあらまのさ也。まひろけ姿ハ衣おとのつま裾の打ひろりて。とりつくろてぬさま也。濱臣云。按女のもとより。衣をかりて来たりしをうへす。あらんうといへり。かきたてハ。諸弁みかきまてとあり。

おくの方ふ云々ハ。手水めせ。禿きこしめせなといふ也。ろくをそハ。禪録といふ也。

ゆ。志ろきまぬども。のうへふ。山吹くれか。るをぞ。をぞ着る。白きひとへのいたく。志がみたるを。うちまとりつ。かきまて。あたる人。ももとらせず。わざとさちて。こどねり。童れつぎく。志まを。身ぢうく。よびよせて。打き。めきて。いぬる。後も。久く。ながめて。短のさる。べき。所々。あど。志のび。お志る。たり。おくのう。さふ。ゆて。うづか。ゆか。どし。て。そ。の。う。せ。む。あ。ゆ。ま。入。て。ふ。づ。く。急。ふ。お。か。り。里。て。文。を。ぞ。こ。る。お。と。ろ。り。り。ける。所。々。ハ。う。ち。ず。ん。ど。たる。と。い。と。を。り。し。あ。ら。ひ。て。直。衣。バ。り。り。う。ち。ま。て。ろ。く。を。ぞ。持。ら。ふ。よ。む。ま。こと。に。い

枕草子 卷五

空

一 村 草 紙 卷 五

うちけしきをめハ使の小舎人童のうへりたるをハハいひもやらず其けしきを見ず也いとわしけしハ美隆云諸本皆かくおれとぞうしけしの誤なるをぞし

目を空みてハ馬上のまふ立文をさくくるさま也

と尊ときやどよちうき所ふるべしありつる使
うちけしきをめハふとよみけしと返すよ心入
るこそいとほしけれ

嬉げなる人 二百八十二段

嬉げなるこりき人の直衣もうへのきぬもうり
ぎぬもいとよくてきぬうちふ袖うちあつく見
えたるが馬ふのりていくまにともふるをの
こさて文を目をそらみてとりよるこそをう
けれ

おのけ 二百八十三段

おの本どち高う危ひろき家の東南のかういど
もあげわたしされば涼いだがすきて見ゆるふ
母屋ふ四尺の几帳たてふおふわらふぞをおき
て三十餘バりの僧のいとふくげあらぬがう
まずみの衣うまおれけきたなどいとあざやうよ
うちけうぞきてかうぞめの扇うちつうひせん
ず陀羅尼よみるよりおのけよいたうおやむ人
おやうつすべき人としておやきやうなる童のう
みかどうるいしきすずしのひとへあざやうか
るをうまかかくきかしてるざり出てよこざま
ふよてる三尺の几帳のまへふるさればとさま
よひぬりむきていと細うふやうなるところを

已らふハ園座也

千手陀羅尼ハ千手
千眼觀世音菩薩廣
大圓滿咒礙大悲心
陀羅尼經といふも
の一卷あり其中今
真言家ハ聲明とす
る所をいふ也
いたうなやむ人お
やハ一本ふいごう
なやめハとあり
うつすべき人ハき
き人をいふ也
とこハ独鉗也

九草草紙卷五

空

枕草紙 卷五

をくといふ一本あり
ちをりみてとあり
目うちひさきてハ
万歳抄目をもさ
きて也。ひふ相通也
といひ。

護法も云々ハ一本
おぼとけのけんも
いとたふとしと更
ゆとあり。又一本
行ふよきとありひて
凋せらる。佛の心
心をへさえるふも
いとまとしとあり
せうとのハ物のけ
ふなやむ女の兄也
團扇するハ彼僧を
うちよそあふく
也。
俗の心ならハハハ

とらせてを、と目うちひさぎてふむだらふも
いと尊とけせうの女房あまたゐてつどひま
もらへり久きくも何らでふるひ出ぬまばも
との心うしなひておこあふまゝにあさぐひぬ
へる護法もげふたふとしせうとれうちきした
る。ハそ冠者どもなどのうしちふるて團扇を
もあり皆尊がりてあつまりたるも俗の心から
バ。いりよをづりしとまどハんみづりらハくる
しうらぬるとありあがら。いみどうこびあがき
たるさまれ心ぐるしさをづき人の志り人など
をらうさくおがえて。几ちやうのもと近くゐて。

のうらましの量の
現心よてあらハ也
みつうらハ云々ハ
加持ふよりましの
調せられ苦むハ
怨みの苦むむて
其童女の苦むむ
ハあらはと知りか
うらのまの
つき人ハ其煩ふ
人也。
ふろしとてハ君
さりて快気とて也
そんなも引さけハ盤
きて。おもゆの膳を
引下る也。
いそいてくるやハ
一本おいそきてそ
見るやとあり。
ことよりいそせハ
物の気降伏して立
さるべきよーとい

きぬひきつくろひたどするをどふふろしとて
ゆなまどおおもてふとりつぐやどをも。わりき
んくハ心もとあしむんも引さげあがら。いそい
でくるや。ひとへあどほげふうす色の裳あどな
えり。まてハあらず。いと清げ也。さる此時おぞ
いみどうことわりいそせなどしてゆるしつき
ちやうのうちふどこそおひつきあさましうも
いでおなる哉。いりなるみつらんとなづりし
がりて髪をふりうけてすべり入ぬれば。あはし
とめて加持すこし志て。いりあはをやりお成
あへりやとて。おあみさるも恥りしげ也。あはし

枕草紙 卷五

林葉
蜘蛛
新
五

をする也。
几帳のうちみ云々
いらりのよりましの
心也。

あさましうもの下
一本おあらそふと
あり。
時のやとい偽時の
おこなひすべき程
みなりしと也。
ほうちの美隆云ほ
そちの誤れはそち
ハ熟本也。ハうとう
ハ谷川氏云小豆を
もて餛飩を煮物也
といつり。又按ばう
ぞうの誤みハあら
ぬ。橋経亮云はう
ぞうハ意難ふて今
の難老解の子也と
いつり。又按尺素往
来お餅餠カヤとい

ちぶらふべきを。時のやどあもなり。飾りぬべけれ
むとてまうり申して出るを。あびしほうちをうたう
まゐらせんなどともむるをいみじういそげバ。所よ
つけける上臆とおがき人。嵐のものとよるざり出
でいと嬉しくたちよらせあへりつるあるしふいここ
がたくおひ臨へらまつるを。唯今おこるやうふ侍
れを及もや。あん悦ひまこえさす。あすもゆいとま
のひまふハおせさせぬつたどいひつ。いとあうね
きぬ物のけふ侍るめるを。いもませめさざらむあん
ふく侍るべきまうしくおせさせめあたるをあん。悦
び申し侍ると。詞すくあよて出る。いとさるとき。小佛

ふもの見えたりと
いつり
いとうれしく云々
ハ上臆の詞也。
いとあふぬき云々
ハ彼傍の詞也。

こゝろしこふハ。駿
者ふても。き匠よて
も。方々ふ出頭なる
ハのさこ。
法師も云々ハ。法師
も時ふあふハ。あし
と也。一本ふあらま
ほしけなる。ささか
れとありて。おやな
と以下の文なり。
のけくひハ。のけえ
り着るるをいふ。

のあらハ。色たまへるとこそおがゆき。
やごとなきおがえ。二百八十四段
きよげなる童のりみながき。又おがきやうなる
がひげおひたれど。おもをさずみかみうるハ。き
又あさうりみむくつけ。ガなるなど多くて。いと
かげよて。こゝか。こよやんごとなきおがえあ
るこそ法師もあらまわし。きわざかめを。おやな
どいりふ嬉しからんとこそお。たりらるるを。
見ぐる。き抱。二百八十五段
きぬの背ぬひう。よせて着る人。又のけく
び志たる人。下すごまき。なげなる上達部の

虎
氏
卷
五

柳草 卷五

れいならぬ人の前
い心ち煩ふ人を見
まふふのま也
今やうの者也ハ昔
こそあれ今やうハ
さやうのすまもあ
りと也
法師陰陽師ハ法師
かりら陰陽師ハ
被なとする也
かみうらふりハ
冠也

御くるま。れいならぬ人のまへみ子をみてい
きたる。をりま着たるこらハの。あしごもきこ
る。それハいまやうの者なり。つづらうぞく志
たる者のいそぎてあゆみさる。法師陰陽師の
かみうらふり志てをらへしさる。又色くろう
やせあくげなる女のかづら志たるひげがちふ
やせくある男とひるねしたふあふの思るう
ひふふしさるふりあらんよるあどハうさちも
ええむ又おしあべてはるふとなりふされバ我
あくげありとておきあるべきあもあらずし
つとめてとくおきいぬるめやまし。又ひるね

つやめきねされハ
眼のあしり走りあ
うめてまふちのえ
れをみたるすべて
ねおきのさま也
ほしゆりみハ正し
うらすくつるさ
まをり也
いけるうひなさ
ハねをきりねの見
くるしきみ依て也
のしひとへハ紅の
うちたる衣也
なぞのとありハ
きぬの単ハ胸のす
きとありてよく見
ゆる故のしひとへ
より思くるしきみ
やと也
おくらう云くハダ

志ておきたるいとよき人こそ今すこしをう
くれえせぐさちハつやめきねをれてよりせず
バおしゆがみも志つべしがささよ見りハ
らんねどのいけるうひかさよ。色黒き人のす
ずしひとへ着たるいとえぐるししのしひと
へおおあじくすきされどそれハうさはあもえ
えむおそのとほりされバあやあらん。
枕ふこそハ 二百八十六段
おくらうなりて文字もかきまむなりたり。まも
つうひなをて。是をりききてをや。はさうしハ目
ふ見え心よおもふ子を人やお見んずると思ひ

九草 氏 卷五

六五

暮あとのやとをいふたるべし以下跋文にて此草紙をかけるよしをいへる也。
人や見んする人の見る物ならばこそ遠慮もせぬ人の見るへき物ならぬハのこ也。
きよりかくしハサッパリとかくしたりといふ也。
涙せきあへてこそハ古今集ハ枕より又ある人もなきをなみとせきあへすもらしつる哉とあるふよれるふて枕草紙と云名よつきて世ももらす心を彼歌をおもひて

てつむぐなるさとるれ不どふりきあつめさるをあいなく人のさめびんかきいひすぐしふど志つべき存くにあはば清うかくしたりとおもふを涙せきあへばこそありふれ宮のゆまへふ内のおととのまりあへりけるをこれふ何をのまうぐへのおまへハ史記といふふみをかへせぬへるなごのたまをせしを枕ふこそハ志留らめと申しうらハ清をえよとてぬをせたりしをあやしきをこよ何やとつきせず多る残のりずをりきつくさんとせしふいと物おがえぬるぞおらるや大くは是ハ世の中を

かけるなり。官のゆあふ云くより此草紙をかきし紙の由来をいふ也枕ふこそハ身をたたすまもらんとのさをよせていへるなる也。
さそえよハザあらハ清少納言ハ其紙をえさするそと后官のおらせらとて賜りしと云。
あやしきをこよや一本ふこしやとあり抄ふ怪しき故事やのされといへり美隆云あやしきをこよやと云ふてをこかましきりのされといへり。
人なみくみ云ハ

らしき子を人のめでとしかどおふべき子程えり出で歌などを本草鳥虫をいひ出したらばこそおふ不どよりハわろし心見えありともそしらぬめ思心ひとつおのづから思ふるをさそふとふ出つけたればおふとちまじり人あみくたるべき耳をもきくべきおらとと思ひしふまづうきなどもある人ものたまふなれたいとあやしくぞあるやがふそれとことこり人のみくむをもよしといひほむるをもあしといふハ心の不どこそおしをうらるまよふ人よ見えけんぞねこまや。

柳 草 約 卷 五

人なみなるべき
やうなハ、まきくも
あらじと思ひし
のき也。
まづうきかき
ハ此草紙を以て
少納言を心ふく
恥らき人とい
人もあきハと也。
それもとよりハ
日びひがくしき心
もおしはうしら
れて恥らしといへ
るも道理ごと也。

この標語を抄のれを以てのり
身をもつれと何とてこゝに
ておわりのは作採抄又子
信綱のりせりては此の
考へては事もおかし
そまつきそ解を抄へ
〜九たや

佐々木弘綱

標註枕草紙讀本 大尾

明治廿四年九月十日印刷
全 年九月十二日出版

版權所有

標註者

佐々木弘綱

東京神田區小川町一番地

印刷兼
發行者

弦卷七十郎

新泻縣下北蒲原郡葛塚町

發賣所
六合館

弦卷書肆

東京橋尾南傳馬町丁目上番地



